震動

発行人　金沢真宗学院
代表者　小林　斉
金沢市安江町15-52
金沢教務所内
電話　076-265-5191

第24号

遺骨を拝して腸を断つ

元金沢真宗学院指導主任　金浦受英

「廟堂に跪ずきて涙を拭い、遺骨を拝して腸を断つ。入滅、年遥かなりといえども、往詣挙りて未だ絶えず」と、本願寺第三代覚如上人（一二七一～一三五一年）は『報恩講私記』に、親鸞聖人なきあとの門弟の悲しみと、教えが後世に伝わるようにと記しています。

末寺で「報恩講」が勤まる時、何百年も前から毎年、『私記文』が読誦されてきました。それは「遺骨を拝して腸を断つ」覚悟が問われ続けてきたのです。しかし、私どもはそれを行事として流してきませんでしたか。そこから、教えに遇い得た感動を実感できたでしょうか。「腸を断ち」身をよじるような生命がけの懺悔をしたでしょうか。

遺骨を拝するということで、次のような逸話が思い出されます。

それは舎利弗の入滅に会われた釈尊が、舎利弗の遺骨を掌にもって、比丘たちに、「比丘たちよ、この遺骨は数日前まで、あなたたちに法を説き、教を施していた大徳舎利弗の遺骨である。法を述べ人々を導いた舎利弗の智慧は深く、勇猛の志をもって、歩み退くことがなかった。舎利弗が亡くなったといって教法が消えることがない。比丘たちよ、今よく舎利弗の遺骨をみよ」と示された。

大いなる悲しみの深さは、大いなる出会いであり、出会いの深さはその人からおくられていながらも、気づきもしなかったものの大きさを表しています。

舎利弗は仏弟子の中で「智慧第一」と慕われていました。釈尊の教えのよき理解者であったばかりでなく、釈尊の教団のよきまとめ役であり、弟子たちのよき理解者でもありました。

私どもはつねにいろんなものごとを見たり聞いたり、分別して知識を積み重ねてよしとしていますが、肝心の「私」を知る作業をおこたっています。あらゆるものに先立って根本に横たわる「私」が明らかになることによって、すべてのことがらがそれぞれにいきいきと場所をもった存在としてよみがえってきます。

「智慧第一」といわれた舎利弗は、あらゆることがらがそれぞれの場所をまもり、どれもこれも過不足なく、背伸びすることなく存在することに満足していける、そういう自分を発見して、その「私」に仏法を聞いていかれたに違いありません。

釈尊は多くの弟子の中で、釈尊の心を理解し生きつづけた舎利弗に、釈尊自身の姿をみられたのでしょう。

私どもが仏法を知識として理解しようとしている姿勢「もし解を学ばんと欲わば、凡より聖に至るまで、乃至仏果まで、一切碍なし、みな学ぶことを得るとなり。」（『教行信証』信巻所引）を批判されているのです。

【現代語訳】

仏法を知識として学ぼうとするなら、凡夫から聖者にいたり、さらにそのうえ仏果にいたるまでも、みなさわりなく学ぶことができる（『宗祖親鸞聖人』から）

今一度「遺骨を拝して腸を断つ」といわれたこと、「遺骨を拝さず腸も断てない」私をあやぶんで、そういう私にかけられた願いの大きさをいただいていかなければなりません。

金沢真宗学院特別講義

『観無量寿経』について
―諸師方と善導大師―

大谷大学名誉教授　福島光哉

《凡例》
▼『観無量寿経』の原文は『真宗聖典』（東本願寺出版）に依る。
▼『大正新脩大蔵経』を「大正」、また『真宗聖教全書』を「真聖全」と略す。

はじめに

『観無量寿経』というお経さまは、浄土三部経のなかでも、やや特異な感じがするお経ではないかと若いときから思っておりました。どういうことかと言いますと、真宗大谷派では『現代の聖典』という書物がございます。いろいろ門徒さん方と一緒に勉強する場合には、そのテキストをもとにするということが盛んに行われておりました。

『現代の聖典』には、どんなことが書かれているかというと、その中心は『観無量寿経』の初めの方に出てきます「王舎城の物語」でございます。皆さん、よくご承知のことでありましょうけれども、それを取り上げて、私たちはここから学びましょうというわけですね。

しかし「王舎城の物語」は、確かに非常に感銘の深いものですが、お経全体からいえば序文ではないかと。善導大師も『観無量寿経疏』（以下『観経疏』と記す）の中で「序分義」ということをわざわざことわって、「王舎城の悲劇の物語」について解説しておいでになるわけですから、そこを強調されて、韋提希という人を通して私たちの凡夫の自覚を深めていきましょうということであったのでしょう。ところがこのお経には、序文の「王舎城の物語」の後に、十六項目にわたる観法について、詳しく説いてあります。しかも、題名が『観無量寿経』（以下『観経』と記す）というのでしょう。無量寿仏、つまり阿弥陀仏を観察すると言ってもいいでしょうね。要するに、阿弥陀如来という仏さまを見る、それが主題であるというお経さまであります。

ところが『現代の聖典』を見たとき、一向に阿弥陀さまを見る、観察するというようなことは、出てこないわけです。何で、こうおかしなことになってきたのかなと、ちょっと疑問でございました。疑問のまま、長い間、忘れていたようなことでありますが、そういうことが一つのきっかけで、『観経』をちょっと勉強してみないといけないかなと思うようになりました。

もう一つ、『観経』というものに特に興味をもつようになりましたのは、私は中国の仏教を中心に大谷大学でも勉強させてもらったのですが、中国の仏教のなかに浄土教以外の、いわば浄土門に対する聖道門の教えのなかに、この『観経』が大変大きな位置を占めており、一生懸命研究している人が次々と出てくるのですね。聖道門の人たちですから、自力の教えを信じている人たちでしょう。そういう人たちが『観経』というお経に大変興味を持っているということは、どういうことなんだろうと。私は浄土三部経の一つとして『観経』というお経さんもいただくものだと思い込んでいて、大事なことは、韋提希さんを通して凡夫の自覚というものを深めさせてもらうお経だと思っていましたが、どうやら聖道門の優れたお坊さん方が一生懸命『観経』を大事にしておいでになるということは、どういうことなんだと。そう思って少し調べてみると、そういう方々は、『観経』の中から、経題であります無量寿仏を観察する、つまり阿弥陀如来という仏さまを私の目の当たりに見るこ

真宗学院を卒業して

卒業式（2016年3月28日）

真宗学院を卒業して

山本　良平

振り返ると、学院に入学したころは、真宗の『し』の字も知らなかった。そんな状況から始まった学院生活もあっという間に終わりを迎えた。

三年生になってしばらくしたある時、ふと、いままで授業で聞いていたことが一つになった瞬間があった。どう一つになったのかという中身は、なんとなくぼんやりと感じたことなので、説明することは難しい。しかし、この『なんとなく』が、『問い』なのだと

とを得ようとして一生懸命修行していかれるということで、関心をお持ちになっているのです。そのためにはどうしたらいいか。『観経』を一生懸命研究して、仏さまを見る。今の場合は無量寿仏でありますけど、こういうのを広く言えば「観仏」と言いますね。

仏さまを見るために、どうするのかというと、まず三昧というものを行じてみる。だから、これをしばしば観仏三昧と言われるのです。三昧と言いますのは、禅・禅定修行だと。私には詳しいことは分からないのですが、そう思えば大きな間違いはないと思います。禅宗の方々が座禅をおやりになりますね。つまり、雑念にまみれることなく、精神を統一していく。心を一点に集中していく。もっと言えば、その一点も忘れてしまうような境地にまでいく。これが三昧とか禅というものを行ずる一つの目的でしょう。そういう厳しい修行をすることによって、今の場合ですと阿弥陀如来という仏さまを見る。これが『観経』というお経さまに説かれている主たる課題であるというふうに聖道門の人々は受け取っていかれたということでございます。

そこで、浄土の教えに説かれている『観経』とは、だいぶ違うなということになりまして、そこの所を少し見ていったこともございます。そういうことを通して、では、聖道門の方から見られる『観経』というお経さまと、善導のご覧になった、あるいは、いただいていかれた『観経』は、どう違うのか。一つのきっかけをそういう所にもって、聖道門の方々と善導と、どう違うのかということによって、少しでも親鸞聖人の受け止め方も明らかになっていくのではないかということを思います。だいぶ年老いてからですけれども、少しひもといてみたことがございましたので、その辺のところを今回、申し上げてみようかと思います。

福島 光哉氏

一　中国浄土教の祖師廬山慧遠

資料に紹介しました曇鸞（四七六～五四二）、道綽（五六二～六四五）、善導（六一三～六八一）は、皆さんも、よく承知していただいている、いわゆる浄土七高僧のうち中国の三僧です。曇鸞という人は、南北朝時代、今から千数百年前の人です。その後、道綽、善導というお二人が隋から唐の時代、つまり仏教が中国で最も栄えたと言われた時代におでましになりました。それから後、中国では、ややもすると、浄土教に関心を持った人はなかったのかなと思うかもしれませんが、とんでもない話です。浄土教に関心を持ち、また研究をした人もたくさんおでましになりました。しかし親鸞聖人は、そういう方々をあえてお選びになっていないということがあるのですね。それはどうしてか。このことは、また新たに、皆さん方にお聞きしたいと思っているのですけれども。

この三人の中国の方の他に、ひょっとしたら、あまり親しみのない人の名前が挙げてあると思います。廬山慧遠（三三四～四一六）、この人は、曇鸞よりも前に活躍されました。しかしこの人は『観経』をご存じないはずです。『観経』が漢文に翻訳されたと言われておりますのが西暦四二四年でありますから、そのときには廬山慧遠という人は亡くなっていて『観経』をご覧になったはずがないわけです。でも、この人

思った。学院に入学した当初、先生から「問いはありますか?」と言われ、「問いってなに?」と思ったことが思い返される。

自問自答、これは、修練でお世話になったフリー（全体統括）がよく口にされていた言葉だ。問いを持つということは、自問自答するということだ。しかし、一人で自問自答しているとよくわからなくなってくることが多い。そんなときに依り処になるのが僧伽だと思う。

学院を卒業するということは、当たり前のように通っていた『場』がなくなるということだ。卒業後は、その『場』を自ら求めて、自問自答を確かめる『場』として、自分を写す鏡として、サンガを大切にしていきたいと思う。

授業の中で、「なぜ勉強をするのか」というお話があった。それは、「教えに出遇ったときに見逃さないために勉強するのです」ということだった。教師という新たな道を歩み始めたいま、この一つの『出発点』を忘れずに、歩んでいきたいと思う。

最後になりましたが、この場をお借りして、ご指導いただいた指導の先生方、教務所の皆様、関係の皆様、支えてくれた仲間や家族に御礼申し上げます。

この真宗学院での三年間は、私にとってかけがえのない宝物です。

をなぜここに挙げてあるかといいますと、中国には中国独自の浄土教の伝統というものがございます。そしてその祖師に当たるのが廬山慧遠という人だと後々の人々があがめておられるわけです。中国の人が書き残したものを見ますと、浄土教の祖師というと必ずと言っていいほど廬山慧遠が出てきます。

確かに、この慧遠という人について調べてみますと、この人は、お経さまとしては主として『般舟三昧経』によっています。『観経』とは、ちょっと違うのですけれども、似ているのは、その内容が、やはり阿弥陀如来を目の当たりに見るということを求めて修行する、そのためにはお念仏を称えることもあるということを、詳しく説いてあるお経です。そのお経にもとづいて、廬山慧遠という人が浄土へ往生するということを求めていかれた。そのために多くの人たちを集めて、ともどもに西方阿弥陀仏の浄土へ往生できるようにと願った人だということで知られています。

二　諸師方の慧遠・智顗・吉蔵、そして善導

その次に、浄影寺慧遠（五二三～五九二）です。これは同じ慧遠ですけれども人が違いますので、区別するために古い方の人を廬山慧遠と呼んでいます。廬山というのは山の名前で、そこで修行なさったのが廬山慧遠です。それに対して、当時、隋・唐のころの都、長安にあった浄影寺で活躍なさった人ということで、この人を浄影寺慧遠と呼んでおります。

この同じ時代に出た人に、天台智顗（五三八～五九七）という、中国の天台宗の開祖に当たる人がいます。日本の天台宗は、比叡山を開かれました伝教大師最澄（七六七～八二二）が中国へ渡って、中国の天台を学んで日本にも受け継いで広めていったということですが、そのもとは中国の天台宗でございます。天台宗の開祖ですから、一般に天台智顗と呼びならわしております。

また同じような時代ですが、嘉祥寺吉蔵（五四九～六二三）という人がいます。日本でも奈良時代に三論宗が中国から伝わってきましたけれども、その三論宗の開祖で、嘉祥寺というお寺で活躍されました。

この浄影寺慧遠、天台智顗、嘉祥寺吉蔵の三人の方が、だいたい似たような時代におでましになっているのですね。この中で一番先輩に当たるのが浄影寺慧遠でしょう。それから天台智顗、それから嘉祥寺吉蔵と、それぞれ十年ごとぐらいに次々とお生まれになったお三方でございます。この三人とも、聖道門の非常に優れた方々であります。慧遠という人は、後々、華厳宗というのが中国ででき上がっていきますけれども、そのお膳立てをしていった人として知られています。その後、天台宗の開祖である智顗、そして当時の三論宗の第一人者である吉蔵という人が、隋から唐の時代に活躍されます。

一口に隋唐時代と呼んでおりますが、西暦六百年をはさんで三十年ほど続いたのが隋でございます。それ以前は南北朝時代といいまして、あの大きな中国大陸を北と南に分断して統治されておりました。それが隋によって久しぶりに大陸を統一することになったわけですね。これが三十年ほどで王朝がかわって唐という国ができ上がりました。唐は西暦六百年代の初めから三百年ほど続くわけですね。この隋唐時代が、中国では最も仏教が栄えた時代だと言われております。道綽禅師や善導大師も、だいたい、この唐の初めごろに活躍なさった人として知られていますし、吉蔵という人も、どちらかというと唐の時代に入ってから活躍した人です。その前の慧遠とか智顗という人は、唐に入る少し前です。だから、

金沢学院を卒業して

馬川　響子

気がつけば三年間あっという間に過ぎてしまいました。途中、辞めたいと思ったことがありましたが、「辞めたらそのことで苦しむ」と親から言われたので、頑張って学院に通いました。授業を聴くなかで特別に深い感動を得たという事はありませんでした。しかし、浄土真宗に深くかかわった人の名前や書籍、また部落差別問題など学院に通っていなければ考えもしなかったことを学びました。

曽我量深や安田理深、特に清沢満之は病気で家族を失ったり、自身もまた肺結核で苦しみ大変な人生を送られたにもかかわらず、救われるとはどういうことなのかということを追求されました。晩年の清沢満之は自分の雅号を「臘扇」、つまり冬のうちわにたとえました。自分を必要の無いものと感じでいた清沢満之は、それでも自分の役割を見出して人生を全うしたところがすごいと思いました。

また、高校の日本史の授業でも習った「悪人正機」という言葉に学院でまた学びました。「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」とあるように、悪人こそ救われると説かれています。今までは悪について倫理道徳上で解釈していましたが、そうではないと

一番活躍なさったのは隋の時代であったと言われています。いずれにしろ、隋唐時代を代表する優れた仏教学僧であったわけです。

しかもこの三人ともが『観経』の研究をして、注釈書も書いておいでになり、そして、それが現代に残っております。善導大師が、有名な『四帖疏』と言われる『観経疏』をお書きになりました。『観経四帖疏』といいますね。四つの章に分かれているから『四帖疏』というのですが、「玄義分」、「序分義」、「定善」、「散善」と続いていきます。この『四帖疏』によりますと、私の『観経』の理解は、「古今を楷定する」という有名な言葉をお使いになっています。当時の人たちが考えているような『観経』は、みんな間違えている、それに対して善導大師は大変な意気込みをもって、『四帖疏』をお書きになったというわけです。その善導大師の『四帖疏』が後に法然上人に、やがて親鸞聖人に受け継がれていき、親鸞聖人が『観経』を了解なさっていくための基礎的な大事な部分を構成することになりますから、われわれはまず、善導大師の『観経疏』に注目しなければならないわけです。

そこで今回は、与えられた時間内で、慧遠、智顗、吉蔵というお三方がお書きになっている『観経』の理解と、それに対して善導大師は、どういうふうな批判を加えて独自の『観経』理解を示していかれたのかを中心に考えてみたいと思います。この人たちの書かれたものは現在まで残っておりますので、必要な所をここで取り上げて、資料として挙げさせてもらいました。これから、資料にもとづいて、このお三方と善導大師とはどう違うのか、その辺を少し見てみたいと思っております。

三『観経』における「宗」―諸師方と善導―

①浄影寺慧遠

最初に「観あるいは経宗について」（資料より）と挙げております。これは一口に言って、『観経』というお経は何を言おうとしているのかと。特に「経宗」、このお経の「宗」となるものは何かということについて論じていくのです。

次の資料は「浄影疏」と呼んでおります。これは浄影寺慧遠の書いた『観経疏』で、われわれの先輩方は、他と区別するために「浄影疏」と呼んでこられたのです。

『観無量寿経』の「宗」と言うべきものは何かということについて、

> この経は、観仏三昧を以て宗と為す。……観仏に二つ有り。一つには真身観、二つには応身観なり。……今、此の所論は別して西方無量寿仏を観ずるなり。
>
> （大正三七・一七三下）

とあります。「浄影疏」では、「此の経は、観仏三昧を以て宗と為す」と書かれています。『観経』というお経は観仏三昧ということがメーンになるんだと言っているわけですね。仏さまを見るということですが、いろいろなお姿の仏さまがおいでになる。それを慧遠は、「一つには真身観、二つは応身観」、つまり、真身の仏さまと応身の仏さまがあるというわけです。普通、仏さまのことは、法身、報身、応身という三身に分けるのですが、ここで分かりやすいのは真身観で、姿も形もましまさない、いわば宇宙に遍満しておいでになるという、目に見えない仏さまであり、究極の真理、道理そのものと言って、いいかもしれません。応身という仏さまは、迷える衆生を済度、救わんがために仏さまにおなりになるわけです。われわれ衆生を救わんがために、おでまし下さった仏さまです。

阿弥陀如来という仏さまにも、法身としての阿弥陀如来はおいでになるが、救いの手をさしのべてくださって、われわれが直接救われていくのは、応

いうことがわかりました。

卒業式を終え、ほっとしたという気持ちが正直なところです。しかし、これで終わりではないと思います。これから職場をはじめ、他者との関わりのなかで色々な相談を受けるであろうと思います。私自身もまた人生の困難に立ち向かっていかねばなりません。そんなときに、この学院で出合った教えを見直し、聞き直したいです。また、教区の集いにも積極的に参加していきたいです。

ありがとう金沢真宗学院

山田　哲男

多くの学院生の方々と違って、私はもともとお寺の出ではなくて、お寺＝敷居が高いというイメージがあったものです。それでも、母が生前に学院に通いその送迎をしていた縁もあり、合格した時は本当にうれしかったことを憶えています。しかしいざ入学したら、授業についていくのがある意味苦痛にもなったこともありました。今になって考えてみると、当時の私は自分だけのために何かためになる仏法を学ぼうとしていた感じがします。それに気づかせてくれたのが、先生方や仲間との出遇い、授業や修練の学び、家族や同僚の応援。卒業を迎えた今、この三つ

身の仏さまのはたらきによるのだという考え方でございます。そういう考え方に立って言えば、「浄影疏」では、「此の所論」ということは『観経』で言う観仏三昧のことですが、「今、此の所論は別して」、他のものと区別してということですね。「西方無量寿仏を観ずるなり」。とりわけ、他のものとは違って、西の方においでになる無量寿仏、阿弥陀仏を観察することであると言ってあります。これも非常に妥当なというか、なるほどなと。分かりやすい解説だと思います。

②嘉祥寺吉蔵

同じようなことが「嘉祥疏」には、観というものには3種類あると言います。

観に三種有り。一つには実相法身を観ず。二つには修成法身を観ず。三つには化身を観ず。実相を観ずとは、……此の経に云わく、是法界身入一切衆生心想中、と。修成法身を観ずとは、……此の経に云わく、是心作仏、と。観化とは、西方浄土仏を観ずるなり。

（大正三七・一八六下）

「実相法身」は、いわゆる法身阿弥陀仏ですね。先ほどから言っております三身というのは、仏さまの姿には、法身と報身と応身と、応身を化身と呼んだり、呼び方はいろいろあります。法身を真身と呼ぶこともあります。吉蔵という人は、この三つの仏さまのお姿を取り上げて、『観経』で言おうとしている観仏三昧というのは、この三種の仏さまが全部ありますというのです。例えば法身を観察するというのは、「此の経に云わく、是法界身入一切衆生心想中」と書いてあります。今、大谷派では『観経』を読誦する場合に「昭和法要式」というのを採用しています。お寺の皆さんは、だいたいご存じだろうと思いますが、その「昭和法要式」の三部経典では、ちゃんとこれが出てきますでしょう。念のために確認しておきますと、

仏告阿難　及韋提希　見此事已
次當想仏　所以者何　諸仏如来
是法界身　入一切衆生心想中

（『聖典』一〇三頁）

とあります。後ほど、これが非常に問題になります。この仏さまは目に見えない、姿かたちのない仏さまのことだというわけです。

次に、「修成法身」とありますが、これが、ここでいう報身のことですね。修行した結果、仏さまにおなりになったと伝えられている仏さまでありますす。それが、この経にいわく「是心作仏」とある。上記の資料のごとく、「諸仏如来　是法界身…」というすぐ後に「是心作仏　是心是仏」とあります。『観経』を読誦しておられる方は、よくご存じだろうと思います。その「是心作仏」というのが、それに当たると言っているのですね。なぜかということまでは、ここでは説明されておりませんけれども、そういうふうに。

それから化身、応身ですね。いろいろな形でもって現れて済度してくださる阿弥陀さま。その中で西方浄土の仏を観察する、つまり西方浄土にましますす阿弥陀仏ということなのですね。その仏さまが応身の仏さま、私どもを済度せんがためにおでまし下さった阿弥陀さまです。

③天台智顗

嘉祥という人は、どの姿の仏さまでも全部観察しなさいと『観経』では教えているのですよと言いたいわけです。次の天台智顗の書いた「天台疏」によりますと、「この経は心観を宗とする」と。これが後ほど大変大きな問題になってくるのです。

此の経は心観を宗と為し、実相を体と為す。……観とは、観に次第三種有り、一心中三観有り。……

（大正三七・二三四上）

心観というのは、心を見ろと。これは観心とも言われます。ほとんど同じような意味で使われます。ここで、ちょっと不思議に思うのは、『観経』ですから、無量寿仏、阿弥陀仏という仏さまを観察するというのが経典の題名にこれからも感謝していきたいと思っています。

苦手な声明作法では先生方はもちろん、わかりやすくアドバイスしてくれた仲間に「ありがとう」。雪道の渋滞で勤行当番に遅刻したとき、さりげなく代行していてくれた仲間にも「ありがとう」。もう時効だと思いますが、授業中にどうしても仕事を内職してしまったとき、あたたかく見逃してくれた先生と仲間に「ありがとう」。授業内容がわからんボヤキを聞いてくれた家族や住職。そしていつもどっしり建っていた本堂。みんな「ありがとう」。そして、修練中に仕事を休んだ時サポートしてくれていた同僚も「ありがとう」。

特に思い出深いのは2回の修練です。かけがえのない時が過ごせました。

移動研修 日野法界寺（2015年9月5日）

であるにもかかわらず、天台には、あえて心観を中心課題、「宗」とするというわけですね。仏さまを観察するというのが、このお経の主題であるにもかかわらず、心を観察するのだと。心の観察と言ったら、私の心を観察する以外にないですね。他人の心を観察するわけにいきませんから。そういうことを言おうとするのが『観経』というお経さまですよと言っているのです。これは、ちょっと思い切ったことになりますので、後ほどになって問題になってくる所でございます。

④善導大師

それでは、善導大師はどう言っておられたのでしょうか。

今此の観経は即ち観仏三昧を以て宗と為し、亦念仏三昧を以て宗と為す。

（『真聖全』一・四四六）

考えやすい観仏三昧ということを、善導はもちろん認めておいでになるのですね。観仏三昧でもあるし、また念仏三昧でもあると。ここでもう一つ、念仏三昧ということを付け加えておいでになるわけです。この場合の念仏というのは、いったいどういうことなのかということにもなってまいりますが、他の所をいろいろ見てきますと、善導大師が念仏とおっしゃるときには、「南無阿弥陀仏」と口で称える念仏ですね。私どもがお念仏を称えると言う場合の、あのお念仏、そういうことを考えていらっしゃったのではないかと思われます。観仏三昧ということは、そのとおりだけれども、同時に念仏三昧ということも、実は、この『観経』の中心課題なのだと善導はおっしゃっておいでになる。これは一つの大きな特色として、真宗では非常に大事な言葉として言われてきたものでございます。

四『観経』序文について

①浄影寺慧遠の見方

これまでは、取りあえず経典の題名のことにすぎませんが、次に、序分をどういうふうに理解していったか。最初にちょっと言いましたように、序分というのは初めから終わりまで、最初の一、二行は別として、ほとんど「王舎城の悲劇の物語」でございます。あの「王舎城の物語」をどうとらえるかということですね。それをいくつか、ここに引用してみたわけですが、まず「浄影疏」、つまり浄影寺慧遠という人が、

此の界の極悪、厭うべきを彰わして、人をして棄背せしめんがためなり。親王の子、猶お相危害す。いかに況や他人をや。即ち人をして同じく浄土を悕わしめんと欲す。故に下に韋提は仏に対して、「唯願為我説無憂悩処、我当往生、不楽閻浮濁悪之世」と説言す。即ち其の事なり。

（大正三七・一七六上）

と言っています。この世の一番悪いこと、これ以上、悪いことはないと思われるほどの極悪、そういうものを厭うべきであるということを表そうとしているのだと。そして「棄背」、捨て去るということです。何を捨て去るかというと、その極悪です。そういう極悪を捨ててしまいなさいということを教えるためだというのです。つまり具体的には、この物語のなかで言えば、阿闍世が父親を幽閉し、さらに頻婆娑羅王だけではなくて母親の韋提希まで幽閉してしまったことは極悪非道だと言われる。そういう極悪は、やってはならないということを言うための物語であるというふうに慧遠は言います。

もう少し説明して、親王というのは、自分の親であり王である頻婆娑羅王のことです。その子どもが「相危害す」。つまり、子どもが親を傷つける。「いかに況や他人をや。即ち人をして同じ

キャンパスレポート

三年生　正門　耕太

私は今年度で学院に通い始めてから三年目になりました。まだまだ授業や特別講義を聞いていても分からないことばかりですが、少しずつではありますが分かるところも増えてきました。前までは月忌参りの時に門徒の方に質問されても、「まだ勉強不足でわかりません」と言って帰って来ていたのですが、今は「私はこんな風に聞きました」と少しは話ができるようになってきました。それは、授業や講義で聞いて疑問に思ったことを先生や父に聞くようになったことが大きいと思います。前までは質問などはしていなかったのですが、夏に行った修練で意識が変わってからするようになりました。修練では大谷大学の学生の方と大垣の真宗学院の方と一緒だったのですが、正直なところ両方とも私と同じようなレベルの方たちばかりなのだろうと思って行

道場長が閉講式で「辛かったこともあっただろうが、温室の時は終わりました。一歩外に出れば誘惑だらけです。あんたそこまでやらんでもええやないかと。」これからも、聖人の教えからずれそうになるたび肝に銘じたいことばとして、確かにいただきました。

く浄土を願わしめんと欲す」。そういうことから言うと、人をして皆等しく浄土へ往生することを願おうとする。願うようにさせたいということですね。そこで、「故に下に韋提は仏に対して、『唯願為我説無憂悩処、我当往生、不楽閻浮濁悪之世』」（『聖典』九二頁）と。これは『観経』の言葉ですね。ちょっと省略してあるところがありますが。「ただ願わくば、わがために」は、韋提希が仏さまに対して言いますね。願わくば私のために苦悩なき所を説きたまえと。われまさに往生すべし。閻浮というのは閻浮提、この娑婆世界のことです。汚いものが満ちている濁悪の世を私は願いませんと言っているところです。これが、先から言ってある極悪のものを表して人を棄背せしめ、浄土を願わしめんとする、そういうことのための序分であると浄影寺慧遠は理解したのです。

さらに続いて、『観経』では「求哀懺悔」（『聖典九三頁』）という言葉が、出てまいります。そこで慧遠は、「求哀して懺悔す」について、

韋提は今、悪子を生み、之がために幽閉せらる。果を以て因を験せば、過は罪あることを明かす。此の罪業を恐れ、現に償うこと尽くさず。当に更に之を受く。故に懺悔して滅すべし。

（大正三七・一七七下）

と言います。「韋提は今、悪子を生み、之がために幽閉せらる」とあるように、つまり韋提希夫人は悪い子、阿闍世を生んで、そのために幽閉されてしまったと。「果を以て因を験せば」、つまり結果から逆に、その原因を尋ねてみるということです。「過に罪あることを明かす」。「過」は過去ということです。つまり、韋提希が子どもに幽閉されましたから、なぜ、そんな目に遭ったかというと、韋提希自身が、きっと、その過去において何か罪があったということを明かしているのだと見るのですね。幽閉されたという結果から見ると、きっと過去に罪を犯したからなのだということです。

そして「此の罪業を恐れ、現に償うこと尽くさず」。韋提希が犯した罪は現在において償うことが十分にできない、償いきれない。「当に更に之を受く」。「当に」というのは未来のことですから、過去に犯した罪があったに違いない。そこで現在世において、それを償おうとしても十分に果たせない。きっと、これは未来にわたっても、さらに罪を受けなくてはならないであろうと。だから、「故に懺悔して滅すべし」。懺悔の法というのは、当時いろいろございまして、懺悔をすることによって自分の犯してきた罪をなくす、滅罪ですね。懺悔滅罪とよく言います。当時、広い意味で戒律を行ずるなかで、そういうことがよく行われておりました。つまり、懺悔することによって、自分の過去において犯してきた罪をなきものにするということでしょう。その罪を償うということです。ここでは、そういうことを韋提希はやろうとしていると言うわけです。韋提希という人物を、慧遠という人は、そのように見ている。これは経文に書かれているとおりの、そのままを受け取れば、なるほどと思えないわけではありません。

②善導大師の見方

では、そういう韋提希を善導はどう見てきたのでしょうか。それが次の「善導疏」において、『観経』の言葉「我宿何罪」について註釈しているところです。

我れ一たび生まれてより已来、未だ曾て其の大罪を造らず。未審し、宿業の因縁、何の殃咎有りてか、此の児と共に母子と為る、と。此れ、夫人既に自ら障深くして宿因を識らず。今児の害を被むるに、是れ横ざまに来れり、と謂えり。願わくは仏の慈悲をもって我れに径路を示したまえ、ということを明かす。

（『真聖全』一・四八四）

「我れ一たび生まれてより已来、未だ曾て其の大罪を造らず」とあるように、これは韋提希の言葉として善導がきました。しかし、実際に座談会で話をすると私よりもはるかに深い知識と高い意識で勉強をしていました。何かそこにいるのが場違いのような感覚がして、もっと高い意識を持って勉強しなければならないのだと思いました。修練が終わってから、疑問に思ったことを聞くということを決めてから授業を受けるようになってからは、分かることが増えたと思います。修練は人によっては嫌なものだったり、退屈なものだと思います。しかし、私には仏教への関心を高め、刺激となるとても良い場所でした。

私ももう三年生になり、学院に通うのも残り一年となりました。私は一年生の時に「信心とは何か」というのを卒業するまでに自分なりの答えを見つけたいと言いました。二年生では見つけられなかったので、今年はそれを考えながら充実した一年にしたいです。

三年生　慈耆　梨紗

今、私は、お寺の娘に生まれてきてよかったと思っている。それは、これまでに多くの素晴らしい出遇いがあったからである。

金沢真宗学院に通い、ここでも、ともに学ぶ素敵な方々と出遇うことができた。何事にもやる気満々で誰とでも仲良くなれちゃう方、しっかりしてい

書いています。韋提希にとっては、私がこの世に生まれてから、それからずっと、いまだかつて、こんな大きな罪を犯したことはありませんと言うのです。私は生まれてからこのかた、息子のために、牢に入れられるというような恐ろしい目に遭わされるほどの罪を犯したことはありませんと、そういうことです。そこで「未審」、よく分からないと言うのです。これが大事ですね。韋提希自身が、私には分からないと。

「宿業の因縁、何の殃咎有りてか、此の児と共に母子となる」と、韋提希はつぶやいたわけです。昔からの、過去世からの深い深い私の業というものの因縁に、どんな罪、殃咎があって、こんな恐ろしい阿闍世という子どもと親子の関係になっただろうか。つまり、どうしてこんな恐ろしい子どもを私は生んだのだろうかということですね。こんな恐ろしい子どもを、私は生んだ覚えがない。また、こんな子を生むほど悪いことをしたことは一度もないと言うわけです。韋提希の正直な心情を告白する、それを善導が韋提希に代わって述べているということですね。

「此れ、夫人既に自ら障深くして宿因を識らず」。これは韋提希が自分の障り、自分の犯した罪、自分がもっている煩悩、そういうものが、あまりにも深いので、原因がどこにあるかということが、自分のことでありながら分からない。今この殃咎、韋提希が、こういう被害を受けることになったのは、何か私が悪いことをして、その結果、報いとして子どもに幽閉されるようになったのだというふうに、うんうんと納得できればいいのですが、韋提希は、そうは思わない。私は過去、こんなに悪いことをした覚えがないのに、自分の子どものために幽閉されるというような、ひどい目に遭っている。これは「横ざまに来れり」、きちんとした筋道があって、原因があって、その結果、私はこうなったというものではないのです。そういうふうに善導大師は、韋提希の気持ちを推し量っているということです。「横ざまに来れり、と謂えり」の「謂」は、しばしば自分勝手な思いとか、そういうときに使われる文字です。読み方としては「おもえり」と読んでいるのでしょうけれども、自分勝手に、こういうふうに思っているのだと。

「願わくは仏の慈悲をもって我れに径路を示したまえ、ということを明かす」。これだけでは、今はピンとこないかもしれないけれども、『観経』にそう書いてあるのです。

「時に韋提希、仏世尊を見たてまつりて」(『聖典』九二頁)、これは、お釈迦さまがお姿を見せられたということです。今まで教えておられた所から、王舎城の牢に閉じ込められている韋提希の所へ、お釈迦さまが現れたのですね。韋提希は、仏さまのお姿を見て「自ら瓔珞を絶ち」(右同)、王さまの后ですから身体に美しいものをいっぱい、立派な宝石などを身につけておられたのでしょう。それを引きちぎってしまって、つまり、自分の身を飾っているものを全部取ってしまった。そして身体全体を、倒して身を伏せてしまった。そして号泣して、文字通り大声で泣いて、仏さまに向かって、こう言ったのです。「われ昔、何の罪ありてか、この悪子を生ずる」(右同)、阿闍世のような子を、どうして私は生んだのでしょうかと言うのですね。さらに、「世尊また、何らの因縁あってか、提婆達多とともに眷属たる」(右同)と。世尊よ、あなたは、どうして、提婆達多のような人と親戚なんですかと。阿闍世が、こういう悪いことをしたのは、影で提婆達多という悪人がいて、これがそそのかしたのだと。こういうことは『観経』には書いてありませんけれども、『涅槃経』や、ほかのお経にはいろいろと書いてあります。だから、どうも、阿闍世にこんなに悪いことをさせたのは、その後ろであやつっているのは提婆達多だというわけです。韋提希は世尊の前で体も全部投げ出して、大変な愚痴のようなことを言うわけですね。つまり、ここには、悲しいことに韋提希が自分自身のことについて、どれだけ勉強熱心な方、いろんなことに気づいて下さるにこやかな笑顔の方、ビシバシ言うことは言って下さる料理上手な姉御肌の方、真面目なんだけれどもお話を聞くと面白い一面をもっている方、新しいことにどんどん取り組む意欲的なおしゃれな方、若いのに考えがしっかりしている頑張りすぎてちょっと心配になる好青年、優しいからみんなに合わせているのかと思えばちゃんと自分の考えをもっている声明の上手な方、若いのにもう社会に出てバリバリ働いているテキストの忘れ物が多い方、みんなの意見をまとめて動いて下さっている奥様一番の方、学ぶことを楽しんでおられいつでも何事にも真剣な着物の似合う方、授業ではたくさんメモを取っているユーモアたっぷり富山弁ばっちりのお酒大好きな方、授業中聞いていないのかと思えば押さえるところは完璧な年齢よりも若く見える方、「いえいえ私は…」とご謙遜されるけど多くのことを知っているインドに行かれた行動派な方、話しかけないとお話して下さらないのに急な感話があたってもへっちゃらな方…。こんなたくさんの楽しい方々に囲まれているのかと思いきやちょっと抜けている

　これから先、もしかしたら、なんでお寺の娘なんかに生まれてきたんだろう、と思うことがあるかもしれない。

け自分が罪深い人間であるかということが分からないということです。そういうことを韋提希は、ここで告白しているのだと。

仏教の言葉で言うと、まさしくこれは韋提希自身の無明そのものです。無明というのは智慧がないということです。本当のことが分からないということです。ここにも書いてありました。「未審、宿業の因縁、何の殃咎有りてか」と。

それから、今、自分がこんな目に遭うのは「横ざまに来れり」というふうにしか受け取りようがないのですね。私が悪いことをした、その結果、こうなったというのではないのです。私は悪いことをしたことがない、どんなに悪いことを私がしたというのですかということです。本当の自分の罪ということが分からない。そのことを指して仏教では無明と言うのでしょうね。そこの所を善導は、きちんと見ぬいておいでになるということです。浄影寺慧遠の場合は、韋提希は自分が過去にやった罪は、ちゃんと分かったことになっているのです。同じ経本を読んでも、慧遠と善導では読み方が違う。決定的に違うと言ってもいいかもしれません。

③慧遠と善導の韋提希という人物の見方

次に「浄影疏」では、韋提希をどういう人だと見ているかというと、

韋提夫人は、実大菩薩なり。此の会に即ち無生法忍を得ればなり。明らかに知る、小にあらず。変化して凡と為る。

（大正三七・一七九上）

つまり慧遠は、韋提希という人は、ただの凡夫ではないと言うのです。もともと大菩薩なのだ、素晴らしい菩薩なのだと。これは、慧遠だけではありません。吉蔵さんも、智顗さんも、そう言います。何で大菩薩かというと、「浄影疏」を見てみると「此の会に即ち無生法忍を得れ」と。『観経』のなかに十六観法が説かれています。それが終わった所に、韋提希は無生法忍を得たと。菩薩としての非常に高い段階の悟りを得たと説いてあります。十六観法が説かれたすぐ後に、「廓然として大きに悟りて無生忍を得」（『聖典』一二一頁）と書いてございます。浄影寺慧遠という人は非常に素直にお経を読んでいかれるのですね。これだけの説法を聞いただけで、こんなに高いレベルの悟りを得られたのだから、もともと韋提希は大菩薩であったに違いないというふうに見て解釈したのです。

それに対して善導は、決してそういうふうに韋提希を見られない。韋提希は「汝はこれ凡夫なり」（『聖典』九五頁）と、お経に書いてあるとおりの凡夫だと。つまり、私たちと何ら変わりのない凡夫だと。その凡夫である韋提希が、どうして救われるか。それを明らかにしようとしたのが、実は『観経』ですよと、これを善導大師は言いたいわけです。そこが決定的に違うのですね。

次に「嘉祥疏」も引用してありますが、こういうことから合わせて、嘉祥大師吉蔵も、これは韋提希だけではありません、「王舎城の物語」に出てくる、ほかの登場人物、阿闍世も提婆達多も、みんな菩薩だと。菩薩たちが、われわれ凡夫を救わんがために、いわば演技をなさったのだと。それが「王舎城の物語」だという受け取り方を致します。菩薩たちが、われわれ凡夫を救わんがために、あえてああいう悲劇の物語を演じたのだという理解をいたします。その辺が聖道門と言われる人たちの見方です。

これは善導大師にとって、とうてい納得できない所であったに違いありません。善導は、あくまで韋提希は、われらと同じ無明にいる、悩んでいる凡夫だと。その凡夫が救われる道を説いたのが、ほかならぬ『観経』ですよと、凡夫の教えですよということを言いたかったのですね。特に、序分をどう理解するかということを通して分かってくるということがあるわけです。

しかし、この金沢真宗学院での出遇いは、私にとって大きな大きな財産であることに変わりはない。

移動研修 安養寺（2015年9月5日）

二年生　松寺　麗子

ずっと学院で学びたいと思っていた私は、昨年、自坊の御遠忌を控えていた春、様々な悩みやどうしようもならない事にもがきながら、今しかないと学院の門をたたいた。ここで学べば苦しみの解決方法や、知識、答えが得られるに違いないと授業に臨んだが、それは最初の講義であっさり打ち破られた。

どの先生の話も、この学院は知識や答えを学ぶところではなく、「自分はどうなんだ」「私とは？　私の問題は何

五『観経』十六観法 ―第七「華座観」と第八「像観」の問題―

①十六観法の概要

次に十六観法について、少し進めてまいりたいと思います。十六観法という言葉は『観経』のお経そのものに出ている言葉です。

はじめに、心を一つにして、心を集中させて西の方に沈んでいくお日さまを観察しなさいというわけです。これを日想観と呼んでおります。「これを日想となし、名づけて初観という」（『聖典』九六頁）。初観ということは、最初の観法の観察の仕方だと。ここでは何も、仏さまは出てこないのです。ただ西の方のお日さまが出てくるのです。二番目は水想、水を観察しなさい。三番目は地観、地面を観察しなさい。四番目は樹木を観察しなさいということが書いてあります。そういうことが続いてきまして、要するに、西方の阿弥陀さまのお浄土というのは、こんなものだというものを自分の心に描きなさい。三昧を行じながら、そういうものを観察していきなさいということです。いわば西方浄土の依報、環境の世界です。これを観察しなさいということを六番目まで書いてあるのです。

その後は、いよいよ仏さまを観察することが出てきます。最初は七番目の「華座観」と言っております。仏さまがお座りになっている華に飾られた坐所を観察しなさいということが主に書かれているから「華座観」と呼んでおります。次の八番目は「像観」と言いまして、仏像を観察しなさいということが続きます。次の九番目は「真身観」と言いまして、いよいよ阿弥陀さまそのもののお姿を観察しなさいということが説かれております。あの有名な「念仏衆生摂取不捨」とか、「仏心者大慈悲是」などそういう言葉が出てくる所です。その後、観音菩薩などが続いて、十三項目からなる観察の仕方について書いてあるのです。

そして、その後には九品往生と言われて、上品、中品、下品と段階がつけられて、その往生していくものの姿が書いてあります。しかも上品上生、上品中生、上品下生とあるように、次の中品にも下品にも三段階あって全部で九種類に分けられますから、九品往生と呼んでおります。それが終わりますと、「これを下品下生の者と名づく。これを下輩生想と名づく、第十六の観と名づく」（『聖典』一二一頁）とあります。ここまで全部で十六種類の観察の仕方について説かれているのです。この部分が『観経』というお経さまの中心と誰が見ても思えるということで、「正宗分」とされているのです。

仏さまを観察するのが一番の目標ですから、十六種類の観法のなかでも阿弥陀さまのお姿を観察しなさいという所が中心になります。それが第七番目の華座観から第八番目の像観、第九番目の真身観までということで、「昭和法要式」でも、これだけは読誦しなさいとなっているのですね。皆さん、ご存じの通りです。

②第七「華座観」の「住立空中」をめぐって ―吉蔵と善導―

華座観のうち「住立空中」（『聖典』一〇一頁）という言葉が出てまいります。阿弥陀さまが空中に立ったお姿で現れてくるという所がありますね。無量寿仏が観世音・大勢至菩薩と共に空中にお立ちになっている。要するに、阿弥陀さまが現れてくるということになるのでしょうか。そのことを諸師はどういうふうに捉えたのか。

嘉祥寺吉蔵は「仏・菩薩、其の人の前に現ずとは、観の境と為す」（大正三七・三四三中）と言います。「境」というのは観察の対象ということです。これも全部、座禅、三昧の状態に入ることによって見えてくるものを取り上げておられるわけです。さらに「彼将に無量寿仏及び二菩薩の観を作さんとか？」ということを教えに学んでいく場であると。そして私はますます悩み深く、自分って何者？　と考える日々が始まった。月の後半十日間ほどの通学が慌ただしい生活に加わった。初めは続けられるのかと思ったが、次第に学院が中心にあり、何だか元気になっている私いた。それは、講義が難しくても、もっと悩みが増えても先生の話を聞きたい、そして仲間に会えるからだ。立場も環境も年齢も違う仲間に出会え、皆それぞれ悩みを抱え一生懸命に生きていることに「私だけじゃない」皆に会える事が大変な通学を楽しみにしてくれた。

夕方からの授業は睡魔に襲われることも多々あるのだが、必死に聞き、帰宅するとほろ酔いの連れ合いに機関銃のごとく話をする。「良かったな、がんばれ」と応援してくれる。本当に有難い。そして今まで、仏法や教えなど話し合ったことがなかったが、そんな時間も時々持てるようになり、何とも嬉しい。無我夢中で過ぎた一年であるが、いよいよ二年目が始まる。「自分はどうなんだ？」初心にかえり、師と友に会えることを楽しみに、この学院生活を大事に過ごしたい。

欲す」（右同）といいます。「彼」というのは行者です。三昧行を行じて、修行をする人が観察したいという仏さまが現れる。自分が観察したいと思えば、それによって、仏さまがその人の前に現れて「観の境と為す」、いわば観察の対象となるのだと。禅定に入って何らかのものを観察する場合には、観察する人と、何を観察するかという、その「何を」に当たる対象がきちんと分けて考えられていることが、しばしばございます。この場合も嘉祥寺吉蔵という人は、そういうことをきちんと分けて、行者が観察したいと思うから現れてきたのだと理解しているところです。

それに対して善導は、「正しく娑婆の化主は、物の為の故に想を西方に住せしめ」（『真聖全』一・五一四）と言います。「娑婆の化主」（お釈迦さま）が「物」（われわれ人間）に対して、西の方に思いを向けなさいというのです。そうすると「安楽の慈尊」（阿弥陀さま）は、「情を知るが故に則ち東域に影臨したもう」（右同）と言います。つまり、東の方に阿弥陀さまのお姿が現れるようになるのだと。

これは説法をなさっているお釈迦さまと、阿弥陀如来という救って下さる仏さまのお二人の仏さま、この二尊が相応じて、われわれ済度のためのことを、きちんとやって下さっていることを表すのだと善導は言っています。そういうふうに、嘉祥大師の場合と善導の場合とは違うのかなと思われる所ですね。

③第八「像観」の問題　―智顗と善導―

十六観法のなかで一番の中心だと考えられてきたのが像観でございます。「仏、阿難および韋提希に告げたまわく、『この事を見已りて、次に当に仏を想うべし』」（『聖典』一〇三頁）と。七番目まで観法をやってくれば、今度は、いよいよ仏さまを心に思いなさいというわけです。どうしてかというと「所以はいかん。諸仏如来はこれ法界の身なり。一切衆生の心想の中に入りたまえり。このゆえに汝等心に仏を想う時、この心すなわちこれ三十二相・八十随形好なり」（右同）。仏さまには、われわれとは違ったいろいろなお姿かたちがあります。全部で三十二の相と、もっと細かい八十種類の「好」があるというのです。「三十二相・八十随形好」といえば、具体的に言えば仏さまのお姿のことです。仏像を見ると、頭の上にこぶが出ていますね。それから足は扁平足だそうですが、その足の裏に至るまで、身体に三十二種類の人間とは違うお姿、相というものがあるというのです。これは古来、言われていることですね。「この心、作仏す。この心これ仏なり」（右同）、その後もいろいろありますけれども、ここまでの所が聖道門の人たちが一番注目したところです。特に、初めに出てくる「入一切衆生心想中」ですね。「所以はいかん」という所から見ますと、まず「諸仏如来」、いろいろな仏さま方は「これ法界身なり」と。難しい言葉ですが、この「法界身」とは何かということを巡っても解釈の仕方が変わってしまいます。これについて一応、「天台疏」の解釈をあげておきますと、

法界身とは、報仏法性身なり。衆生の心浄なれば、法身自在の故に、入衆生心想中と言う。白日の天に昇れば、影は百川に現ずるが如し。即ち是れ三十二相・八十種好とは、仏身自在にして、能く物に随いて現前す。仏・菩薩はこれ能随を顕すを明かす。……又入一切衆生心想中とは、此の観仏三昧は解と入と相応するを得る、故に入心想中と言うなり。

（大正三七・一九二中）

と。修行する人の心が清くなれば、仏さまが衆生の心想のなかにお入りになるということです。仏さまの法身は自由自在で、目には見えないですから自由自在に出たり入ったりできると解釈しているわけです。それはちょうど「白日の天に昇れば、影は百川に現ずるが如し」とあるように、お日さまが上がってきますと、その影が、川が百あるとすれば百の川に全部、同じように映りますね。そういうことに喩えて言おうとしているのです。お日さまは、たった一つなのに影は百もあると。さらに「即ち是れ三十二相・八十種好とは、仏身自在にして、能く物に随いて現前す」と。だから、その例えと同じように、それぞれの行者が一生懸命に仏さまの姿を見ようとすると、その対象として、行者それぞれの心にも、仏さまは入っておいでになるということを言おうとしているのでしょうか。さらにまた、「仏・菩薩はこれ能随を顕すを明かす」と。仏さまは、そういう行者の心に応じて現れてくるということだから、それについていくのが、仏さまだというのです。さらにまた、「又入一切衆生心想中とは、此の観仏三昧は解と入と相応する」といいます。これも天台独自の観察の仕方と言いましょうか。天台では、しばしば止観と言いますね。簡単に言えば、「止」というのは、心を止めることです。日常、私どもは心がしょっちゅう動いています。あれを思い、これを思いしていますね。そうではなくて、心をきちっと止めることによって物事が見えてくる。これが止観という言葉の取りあえずの意味です。

これは禅と同じことです。禅の修行をする人は喩えとして、池の水は風が吹くと表面が波立って、そのため底に

何があるか見えません。ところが、風が止まって表面が静かになると、透き通って底の方まで全部見えてくると、よく言います。なるほどなと思うたとえです。それと同じようなものだというのですね。人間というものも、心を静かに、鏡のようになったときには、今まで見えなかったものも全部、底の底まで見えてくるというわけです。禅というのは、そういうものだと。

天台で言う止観も、そうです。心を止めたら見えてくる観ですから。だから観というのは、普通に私たちが物事を観察しましょうというようなものではないわけですね。心を鎮めることによって、おのずから心に映ってくる、見えてくる、それを観と言います。『観経』の「観」というものを、みんなそう思って、当時の人たちは行じてみましょうとなったわけです。この場合に、やみくもに「心をとどめて私は、こういうものが見えました」、「私は、心を鎮めて、こういうものを悟りました」ということを言い出したら人さまざまになっていくのです。実際、天台智顗のころには、よくそういう人がいたらしいです。そういうものを批判して、おまえさんたち、それは駄目だと言うわけですね。自分勝手に、こういうものを悟ったというのは駄目だと。まずお経を読みなさいというわけです。仏教の道理というものを、お経を通して理解して、そのうえで、こういうことをやりなさい。そして、お経に書いてある道理に合ったものが自分の心に見えてくるかどうか。そこの所を、きちんとしなければいけないだろうというのが天台の言う止観というものなんですね。実際に修行するというのは、もっぱら止観ですから、非常に厳しいものを要求するわけでございます。

「解と入」とありましたが、「解」というのは、お経に書いてあることを間違いなく理解するということです。自分勝手な判断をしないということですね。自分が理解したというか、お経に書いてある、その道理と、私が修行をすることによって、仏さまが心の中に入ってきたこととが一致しなければいけない。これを「解入相応」と言いまして、この文章だけでは説明不足で、いま申し上げましたようには、なかなか理解しにくいですけれども、そういうもののことを言おうとしているわけです。天台では、これだけ言えば分かるということなのでしょう。

そうすると、もう一度繰り返すようなことですが、お経には「是心作仏」と「是心是仏」というのが出てきます。作仏というのは、仏さまになるということです。ほかのお経でも、よく出てくる言葉で、仏をつくるのではないのです、仏になるということです。行者の心が仏さまになると言っているのですね。さらに続けて、お経には「是心是仏」とあります。この心は、これ仏なりと言っています。そこまで来ると、行者の心は、そのまま仏さまになっているわけです。日本語で言うと、かえって間違ったりすることも多いのですが、この場合の「是」というのは、英語のbe動詞みたいなものだそうです。心と仏をつなげている言葉ですね。「A is B」、AはBであるというのと一緒ですね。だから、この心は仏であるということです。行者の心に仏さまが入ってくるというときは、入ってくるまでは、仏さまは心の外にいらっしゃったような印象を持ちますね。どこかよそから、私の心が清くなったから、仏さまが入ってきたと。これだけの修行をした結果、ついに報われて、仏さまが私の心に入って下さったというのは、大変大きな喜びだそうです。自分が何かを悟ったという気持ちになるのでしょう、きっと。

ところが、そういうふうに思うのは、まだ外から仏さまが私の心に入って下さったという気持ちが抜けきらないが、本当は、もともと、このいのちがけで行じている私の心が、そのまま仏さまなのだというのが「是心是仏」だというのです。「是心作仏」というのは、私が仏さまになったと非常に感激する大きな瞬間でしょうか。ところが、もっと突き詰めて言えば、今になって初めて仏さまが入ったのではない、もともと私の心が仏さまだというわけです。こういう「さとり」が、当時の中国における大乗仏教の一番の目標でもあったわけです。私の心は、そのまま仏さまである。「生仏不二」と言います。衆生と仏が二つではないということです。私たちはどうしても、仏教は仏さまになる教えだから、仏さまに対して私はということになります。ところが仏教の修行をすることによって、もともと、これはイコールだということが分かるのです。大変、大胆というか、この辺にまでなってきますと、それこそ私どもが煩悩にどうのこうのとか、韋提希が苦しみ悩んだとか、そういう悩みそのものが仏だというのです。「煩悩即菩提」と言うでしょう、大乗仏教では特に。それは極致だというわけです。煩悩のはたらきが、そのまま菩提。菩提ということは悟りへの道、あるいは悟りそのものと言ってもいいかもしれません。煩悩があるからこそ悟りがあるのだということです。

われわれは、それを聞くと詭弁みたいに聞こえてきて、勝手に言葉遊びをしているようにしか聞こえないときもありますけれども、『観経』を通して、そういうことをキャッチしようとしている所がございます。そういうことがありますので第八の像観は、特に天台では古来、非常に大事なものであると

主張してきたわけでございます。そして天台のこの考え方は、中国ではずっと後まで、宋の時代まで引きずっていく大きな課題となってまいります。

善導は、浄影寺慧遠や天台智顗、嘉祥寺吉蔵といった人たちを諸師と呼んでいます。その諸師と言われる、いわゆる聖道門の優れた坊さん方に対して、善導が第八像観の辺りについて厳しく批判しているのが「善導疏」の「指方立相」です。

或いは行者有りて此の一門の義をもって、唯識法身の観と作し、或いは自性清浄仏性の観を作すは、其の意甚だ錯れり。絶えて少分も相似たること無し。既に像を想えと云いて、三十二相を仮立せるは、真如法界の身、豈相有りて縁ずべく、身有りて取るべけんや。然るに法身の色無く、眼対に絶えたり。更に類として方ぶべき無し。故に虚空を取りて以て法身の體に喩うるなり。又今此の観門は等しく唯だ方を指し相を立て、心を住せしめて境を取らしむ。総て無相離念を明かさず。如来、懸かに末代罪濁の凡夫を知ろしめして、相を立て心を住すとも、尚得ること能わず。何に況や相を離れて事を求めんは術通無き人の空に居て舎を立てんが如し。

（『真聖全』一・五一九）

こういう理解をする者があるが、大変大きな間違いだとおっしゃっているのですね。「絶えて少分も相似たること無し」。ほんのちょっぴりも正しいものはない、まったく駄目だというわけです。続いて「既に像を想えと云いて、三十二相を仮立せる」。このように、ちゃんと仏像を観察しなさいとお経に書いてあるではありませんかと。三十二相だとか八十随形好とかいうのは、まさしく、仏さまの姿かたちを言うわけですね。そういう姿かたちがあるということは、取りも直さず法身の菩薩、仏さまではありません。それは、私たち人間を救わんがために人間の姿かたちに似せて現れて下さった仏さまですから、私たちを済度する、私たちを救済してくれる仏さまのお姿として現れて下さったのだというわけです。だから、この仏さまは、「唯識法身の観」という法身とか、「自性清浄仏性」とか、そういう仏さまではありませんというのです。

それに対して善導は、では何のために『観経』に三十二相だとか言わねばならなかったのですかと反論しているわけです。「三十二相を仮立せるは、真如法界の身、豈相有りて縁ずべく、身有りて取るべけんや」。相というのは姿かたちでしょう、そういったものは、どこにあるのですかと。

「然るに法身は色無く」、「色」というのは姿かたちです。仏さまは形というものがない。また「眼対に絶えたり」。まなこで、ちゃんと見えるものではない。目に対するものから超えているというわけです。そういう仏さまであると、唯識法身の観とか、自性清浄仏性の観とか、…人は言うけれども、そうではありません。また「又今此の観門は」、いわゆる『観経』の像観は「等しく唯だ方を指し相を立て」、西の方角を指して、そこに阿弥陀さまのお姿を立てるといいます。そのお姿というのは次の真身観のところで出てきますね。阿弥陀さまのお姿は、こういうものですよと。身長は、これぐらいですよとか、目と目の間は、これだけですよとか、ちゃんと寸法まで書いてあります。そういう所は、どう考えていいか分かりにくい所があるから、あまり気にせずに、われわれは読んでしまいますけれども、『観経』を読誦するときは、ちゃんとそこを、みんな読んでいるのです。実際にどれぐらいの大きさかということは、例えば浄影寺慧遠という人は考えています。これによると、身長と目と目の間のバランスがよくない。きっと、これはお経を翻訳した人の数字の間違いだということまで言っているぐらいです。

そういう姿かたちまで書いてあるわけです。そのことを善導は言っているのですね。そういうふうにして方を指し相を立てたということが「指方立相」ということです。そして「心を住せしめて境を取らしむ」。心をとどめて座禅のような状態にして、そして観察の対象としている。「総て無相離念を明かさず」。姿かたちもなければ思いそのものもないという、極めてハイレベルな禅定修行ということを『観経』には書いていないと。「如来、懸かに末代罪濁の凡夫を知ろしめして、相を立て心を住すとも、尚得ること能わず」。今の凡夫には、姿かたちを現して、西の方ですよと方角を示してやっても、なかなか見ることができなくなってしまっているのではないかと。まして、姿かたちもないということをして、仏を求める。それは「術通無き人の空に居て舎を立てんが如し」と。「術通」は、まじないですかね、手品ですかね。そういうすべを持っていない者が空中に家を建てようとするようなもので、そんなことはできっこないというのが、善導の「指方立相」の言わんとしたことです。だから、この諸師たちは『観経』を通してハイレベルなものを構想しているけれど、そうではありません。もっと普通の、われわれの観法として教えてくれているのですよということを力説した、これが善導の見方でございます。

六『観経』十六観法の九品義について

さらに次の九品義のところに、そのことがはっきりと出てくるということでございます。

大乗人中、種性以上を説いて上品と為す。小乗人中、凡より聖に至る持戒・無犯を説いて中品と為す。大乗人中、外凡の有罪を説いて下品と為す。その上で、

上品上生……四地以上の菩薩
上品中生……初・二・三地の信忍菩薩
上品下生……種性・解行の菩薩
中品上生……小乗人中、前三果（須陀洹・斯陀含・阿那含の三果）。彼に生まれて即ち阿羅漢を得る。
中品中生……内外二凡のうち、浄戒を持ち出離を求める者
中品下生……世俗の凡夫で、種々の世福を修し、出離を求める者
下品の三生…大乗始学の中、外凡の罪有る者。

（大正三七・一八二以下）

上品というのは、一口に言って、上品上生、中生、下生と言って、これは菩薩のことであるといいます。それから、中品というのは、上生、中生、下生の三つがありますが、これは小乗の上人。小乗仏教で究極の悟りは阿羅漢という悟りですから、阿羅漢という悟りに至る人たちのことを中品と呼んでいるのだと、このように浄影寺慧遠は言います。下品は何か。下品は、資料に書いてあるとおりを読んでみますと、みんな悪いことをする人間ばかり挙げてあります。ご覧いただいたら分かるとおりですね。『観経』の下品のところはみんなそうですね。例えば、「下品上生とは」という所から、「あるいは衆生ありてもろもろの悪業を作れり。方等経典を誹謗せずといえども、かくのごときの愚人、多く衆悪を造りて…」（『聖典』一一八頁）ということが書いてあります。要するに、慚愧しないことが悪人です。その次の下品中生になったら、もっと悪い。さらに下品下生ということを言われる。ここによると、下品下生とは「あるいは衆生ありて、不善業たる五逆・十悪を作る」（『聖典』一二〇頁）。そういうふうなものが下品下生だと。「種種に安慰して、ために妙法を説き、教えて念仏せしむるに遇わん。この人、苦に逼められて念仏するに遑あらず」（右同）。そういうふうなのを下品という。それでも、そういうものもあえて「南無阿弥陀仏」と称えることによって往生ができるのだとなるわけですね。念仏によって往生できるということを『観経』で説いてある。ここの所は非常によく知られている部分ですけど、これが下品下生です。

浄影寺慧遠という人は、この上品というのは、大乗の菩薩さんなのです。中品というのは、小乗の聖道の方々。小乗といっても仏教ですから、その小乗の教えを行じて阿羅漢になる。そういう人のことだと。そこまで分かった。下品というのは悪いことをする人ばかり。悪いことをする人は、仏道の上で、あなたはこのぐらいの段階まで来ましたということもないわけです。よい行いをして、初めてこの段階にきたと言える。そういうことから言うと、その中に入ってこない。悪いことをする人ですから。だから、慧遠さんもこの辺は、どうもお手上げになっておられます。私にも分からないということを言っているのですね。あえて、大乗を学び始めたばかりの人。あなたは学び始めたばかりだから、悪いことばかりしていると。そういう人だということを言っているわけです。自分もよく分からないと。しかし、そういう人が救われると『観経』には説いてある。特に下品下生なんていうのは、「南無阿弥陀仏」と口に称えることによって、浄土に往生できるということが説いてあるわけでしょう。だから、とてもじゃないが、こういう人たちのことは信じられないことですから、ここの所はよく分からないというのですね。そんなことを言っています。

では、善導さんはどうだったかというと、全部、これは凡夫のことだとおっしゃります。

又此の『観経』の定善及び三輩上下の文意を看るに、総べて是れ仏の世を去りたまいて後の五濁の凡夫なり。但だ縁に遇うに異なり有るを以て九品の差別せしむるを致す。何となれば、上品の三人は是れ大に遇える凡夫、中品の三人は是れ小に遇える凡夫、下品の三人は是れ悪に遇える凡夫なり。悪業を以ての故に、終りに臨みて善に籍り、仏の願力に乗じて乃ち往生を得、彼に到って華開けて始めて発心す。……上来、十句の不同有りと雖も、如来、此の十六の観法を説きたもうは、但だ常没の衆生の為にして、大小の聖の于にせずということを証明するなり。

（『真聖全』一・四五三以下）

「上品の三人は是れ大に遇える凡夫」。この「大」とは大乗です。大乗仏教のことですね。「中品の三人は是れ小に遇える」。これは小乗仏教ですね。「下品の三人は是れ悪に遇える凡夫な

り」。遇うのが、大乗であったり、小乗仏教であったり、あるいは悪であったり、いろいろある。縁に遇うというのがいろいろだけれども、凡夫であることには違いないということです。そういうふうに、善導さんは九品というものを受け取っていかれるわけです。

さらに、ずっといろいろ、ここまで『観経』の文章を十句取り上げたうえで、「上来、十句の不同有りと雖も、如来、此の十六の観法を説きたもうは、但だ常没の衆生の為にして、大小の聖の于にせずということを証明するなり」。つまり、この『観経』の十六の観法。これはお経そのものに説いてあるとおりですね。十六の観法を教えたのは、大乗や小乗という、その上人だけのために教えたものではなくて、常没の衆生のためにある。これが、『観経』を受け取るときの一番大事なことだと、善導大師が主張なさったことであろうと思います。

そういう所で、善導大師がいかに諸師、聖道門の諸師方と違った見方をしておいでになったか。これぐらい触れれば、だいたい分かることです。

七　善導の独自性について

そのほかに、善導さんは『観経』について、聖道門の人たちには気が付かなかった部分について、非常に注意して解説しておいでになってございます。

それが五正行ですね。諸師方ではほとんど無視してしまうというか解説も何もなさらないものについて、善導さんが独自の解説を試みておいでになる。それを少しだけ見ていきたいと思います。

まず、第一に、これも皆さんはよくご存じでございますから、詳しいことを申し上げるまでもないと思います。まず、最初に、善導さんといえば誰もが知っている二種深信というお教えでしょう。

深心と言うは、即ち是れ深信の心なり。亦二種有り。一には決定して、深く「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁有ること無し」と信ず。二には、決定して、深く「彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を摂取して疑無く慮無く、彼の願力に乗じて定んで往生を得」と信ず。

（『真聖全』一・五三四）

「深心と言うは、即ち是れ深信の心なり。亦二種有り」となって、いわゆる二種深信が含まれていると言うことでございます。一番目の方は、「深く『自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし』と信ず」というのが、これが機の深信といわれてますね。二番目に、「決定して、深く『彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を摂取して疑無く慮無く、彼の願力に乗じて定んで往生を得』と信ず」。これが法の深信と呼ばれてきた。そういうことで、機法二種深信と言うこともあるようでございます。これは、善導さんが『観経』の上品上生の三心、三つの心の第二番目、「二者深心」とあります。「深いこころ」と読みます。その深い心という言葉についての注釈のところに、これが出てくるわけです。

ほかの諸師方はどう見ているか、特別な関心を持っておいでになるとは思えません。むしろ、一者至誠心です。あの至誠心とか、あるいは三番目の回向発願心とか、ここらは非常に仏教的ですから、そういう関心を持って注釈があるのですが、二番目の深心、「深いこころ」と書いてあるだけですから、ほとんど注釈らしい注釈が見られません。文字通り、深いこころということぐらいしか出ない。ところが、善導大師はそれについて、詳しく解釈して示してくださっています。中でも、この二種深信は有名なものです。これに続いて、同じ「信」ということについて、「行に就いて信を立てば」というところに、正行と雑行という二種類の行があると善導大師は示しておいでになる。

行に就いて信を立てば、然るに行に二種有り。一には正行、二には雑行なり。正行と言うは、専ら往生経の行に依りて行ずる者は是れを正行と名づく。何をか是れなるや。一心に専ら此の『観経』『弥陀経』『無量寿経』等を読誦する。一心に彼の国の二報荘厳を専注し思想し観察し憶念する。若し礼せば、即ち一心に専ら彼の仏を礼する。若し口に称せば即ち一心に専ら彼の仏を称せよ。若し讃嘆・供養せば即ち一心に専ら讃嘆供養する。是れを名づけて正と為す。又此の正の中に就いて復二種有り。一には一心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥、時節の久近を問わず、念念に捨てざる者は、是れを正定の業と名づく。彼の仏願に順ずるが故に。若し礼・誦等に依らば即ち名づけて助業と為す。此の正・助二行を除きて已外の自余の諸善は悉く雑行と名づく。

（『真聖全』一・五三七）

その正行というのは、一番目に読誦、二番目に観察、三番目に礼拝、四番目に称名、五番目に讃嘆供養。こういったように、五種類の五正行、正しい行

というものが示されている。これは善導さんが何を言ったかというと、『大経』、『観経』、『阿弥陀経』、このいわゆる浄土三部経にもとづいて、その行をあげれば、これは五つの正行、五正行といわれるものであると示しておいでになります。その五正行の中でも、特にここで挙げたものでいえば、「又此の正の中に就いて復二種有り。一には一心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥、時節の久近を問わず、念念に捨てざる者は、是れを正定の業と名づく」。正定業として念仏ということをおっしゃっておいでになる。これはなぜか。「彼の仏願に順ずるが故に」。これが唯一の決定的な根拠と言ってもいいでしょう。『大無量寿経』（以下『大経』）に説かれている本願でございましょう。『大経』の本願に順ずるからだと言われる。これを正定業とする根拠は、これだとおっしゃっているんです。

あとの四つ、礼拝とか読誦とかいうものは「助業」であると。「此の正・助二行を除きて已外の自余の諸善は悉く雑行と名づく」と善導大師はおっしゃっているんです。そういうふうにして、いわゆる称名念仏ということが、ここから確立されてきたということが分かるかと思います。

その次に、「散善義」の流通を釈する所には、「仏告阿難、汝好持是語・持是語者、即是持無量壽仏名」という経文について、

正しく弥陀の名号を付属して、遐代に流通することを明かす。上来、定散両門の益を説くと雖も、仏の本願の意を望まんには、衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称するに在り。

（『真聖全』一・五五八）

と解釈されています。これは「仏、阿難に告げたまわく、『汝好くこの語を持て。この語を持てというは、すなわちこれ無量寿仏の名を持てとなり』」と、このように『観経』に説かれている。それを解説して、善導さまは「正しく弥陀の名号を付属して」と。付属ということは、お経の末尾によく見られますように、仏さまがお弟子たちに、後世にまで伝持すべきこととして、教えられることを言います。それを今、『観経』の場合は、阿難に対して、こういうことをおっしゃるのです。これを善導さんは「弥陀の名号を付属して」と。付属というのは、そういうことを言うのですね。

「遐代に流通することを明かす」。はるかの時代まで、後々の時代まで流通することを明かす。「上来、定散両門の益を説くと雖も、仏の本願の意を望まんには、衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称するに在り」。これまた善導さんの『観経』解釈の非常に特色のある所です。つまり、『観経』というお経さまは、無量寿仏を観察するという題名のお経さまである。つまり、観仏三昧、観仏の方法を説くお経さまです。仏さまを見るということのための修行をする。実際、お経には、十六の観法というものが説かれている。しかも、これは禅定に入って修行するもの。あるいは禅定に入らなくても、散善のまま、その修行法が説かれている。いずれにせよ、そういうふうにして説いてきたのが大部分であって、いわゆる十六の観法は全部がそれに当たるわけですが、その十六の観法を後々に伝えてほしいと言われるのではなくて、善導さんは「仏の本願の意を望まんには、衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称するに在り」と受け止めていかれたというのです。あれだけ『観経』の大部分を占める十六の観法は、そのまま後世に伝えてほしいのではなくて、伝えてほしいのは何かというと、南無阿弥陀仏を称えることだと。善導さんは、そのように「一向に専ら弥陀仏の名を称するに在り」と、そこを受け止めていかれたということです。

しかも、それは、一般に『観経』に称名念仏を教えているのはどこかというと、いわゆる下品下生のところで教えられているといわれます。いわゆる聖道門の諸師方も、『観経』で称名念仏を教えていると。その根拠は何かというと、特に下品下生だと。だから、一番悪いやつが念仏を称えると救われるのだと、このように理解していたようでございますが、善導さんはそこではないんですね。その後に出てくる流通分のところで、どのようにして『観経』を伝えていくかというところで出てくる言葉を通して、それが「仏の本願の意を望まん」と。阿弥陀のご本願というものに立ってみれば、弥陀仏の名を称することに尽きるのだと。それを伝えていきなさいと教えられたということです。

然るに娑婆の化主、其の請に因るが故に、即ち広く浄土の要門を開く。安楽の能人、別意の弘願を顕彰す。其の要門とは、即ち此の『観経』の定散二門是れなり。定は即ち慮を息めて以て心を凝らす。散は即ち悪を廃めて以て善を修す。斯の二行を廻して往生を求願せよとなり。弘願と言うは『大経』の説の如し。一切善悪の凡夫、生を得る者は、皆阿弥陀仏の大願業力に乗じて、増上縁と為さざること莫し。

（『真聖全』一・四四三）

これは、善導さんが『観経』というお経をどう見られたかを学ぶ上で、大切な部分です。「然るに娑婆の化主」。娑婆の化主というのは、お釈迦さんです。娑婆のわれわれに対して説法して、

仏教を教えてくれているのはお釈迦さんですから、お釈迦仏という仏さまである。このお釈迦さまが仏になったのは、「其の請に因るが故に、即ち広く浄土の要門を開く」と書いてあります。これは善導さんがおっしゃっているんですよ。浄土の要門を開いたと。「安楽の能人」というのは、安楽国の優れた人。これは阿弥陀仏です。それから、阿弥陀仏が「別意の弘願を顕彰す」。弘願を明らかになさったと述べているわけです。

ここで、一つ注目しておくのは、善導さんがこのように、お釈迦さまと阿弥陀さまのお名前を挙げて、それぞれが、阿弥陀さまとお釈迦さまが一つの目的のために、一緒にわれわれのために教え、さとってくれているとおっしゃるんですね。

ここでは、ちょっと言葉の意味が難しくて分からない所なのですが、お釈迦さまは浄土の要門を説いています。要門とは何かというと、定散二門。定善と散善。つまり、十六の観法です。これが要門だということを善導さんも言っているのです。「『観経』の定散二門是れなり」と。定と散を分けておりますから、要するに、禅定に入っていることと、禅定に入っていないことと二種類に分けて、定散二門と言っています。そして、「斯の二行を廻して往生を求願せよ」と。定、散、二門を行じて往生を求願せよと。お浄土に往生できるように求願しなさいと言っているわけです。「求願」とは何かというと、これは『大経』の第十八願に基づくことになるわけです。「一切善悪の凡夫、生を得る者は、皆阿弥陀仏の大願業力に乗じて、増上縁と為さざること莫し」。このように解説している。

『観経疏』の玄義分というのが最初に出てまいりましたね。『観経』というお経さまの根本的な部分。いわば『観経』哲学と言ってもいいかもしれません。『観経』とは何かということに対して説いている所が玄義分でありますから、そこの所に、このように善導さんがおっしゃっておいでになる。これは、善導さんの『観経』をいただく立場を非常に鮮明にしていることです。親鸞聖人も非常に感激なさったんでしょう。『教行信証』にそのまま引用しておいでになります。

そういうことからいいますと、善導大師は『観経』というお経をどのようにご覧になったかということを、言葉を換えていいますと、『大経』、『無量寿経』というお経の上に、『観経』を位置付けておいでになるということです。もっと言えば、『観経』をお読みになるのに、『大経』を抜きにしてはお読みになっていらっしゃらないということです。常に『大経』というものをしっかりと身に付けて、その上で『観経』をお読みになったと言えると思います。そうでないと、先ほどの付属の文章の所なんかでも、そういう解釈が出てこない。つまり、「仏の本願」というものに立って『観経』を読む。『大経』の上に立ててというと語弊があるかもしれませんが、むしろ、『大経』に説かれている本願に立って『観経』をお読みになった。そう読めば、全てが解決するのではないかと、うなずけるのです。

おわりに

今日、申し上げました、最初の『観経』の序分の中で、韋提希という人はわれわれと同じ普通の凡夫だよと。こういうふうに受け止められたのも、これも本願の上に立って『観経』の「王舎城の悲劇」をお読みになったから、そう受け止められたのでしょうね。そうでなかったら、諸師たちのように、韋提希さんはもともと立派な菩薩であったとか、あのような解釈も出てくるわけでしょう。ところが、そうではない、ごく普通の凡夫だと受け止められたということは、あくまで『大経』の本願に立ってご覧になっているということです。これが決定的な立場の違いということになるかもしれません。

では、ほかの諸師たちはどうかというと、『観経』を大変高く評価したわけですよ。非常に優れたお経だというのです。それは、ほかの大乗経典と比較して、『般若経』であるとか、『法華経』であるとか、『涅槃経』であるとか、当時の中国の仏教界で代表的といわれた大乗経典と並んで、それに匹敵するお経だよといって『観経』を受け止めたわけです。そうしてみると、ほかの大乗経典と同じ所に立って、あるいは、ほかの大乗経典に書かれている教えに立って『観経』を読んでいけば、諸師たちの解釈に近づいていく。

以上のように『観経』を学んでいきますと、改めて『観経』に導かれて、自己を学ぶということの不思議さを感じます。と同時に、仏道を学ぶというのは、どういうことなのか、の問いに何らかの示唆が与えられるように思われてなりません。

金沢真宗学院特別講義

御同朋精神と解放運動－親鸞不在－

第十一組光專寺前住職　木越　樹

差別の問題と真宗の関わり

今日は部落差別の問題が我々の真宗と一体どういう関わりがあるのか学んでいきたいということなので、「御同朋精神と解放運動」という講題をつけました。副題として親鸞不在という問いを立てました。親鸞聖人の教団に親鸞が不在ではないかと厳しい問いかけが部落解放同盟から出されています。今だに、それに応えきっていないというのが現状です。

部落解放運動といいますと、ハンセン病の問題やアイヌ問題、あるいは在日朝鮮・韓国人と日本人の問題などいろいろあります。現在も世界中から問われている問題として、従軍慰安婦問題があります。サンフランシスコでは銅像まで設置されています。そういう中でこの問題を自らの問題として考えていこうというのが、宗門が解放推進本部を持っている大事な意味であります。そういうことは社会問題ではないか、我々の信心の問題と関係のないことではないか、大概皆さんも思われると思います。

皆さんにはどぎついなと思われるかもしれませんが、友永健三さんという方が出版した『部落解放を考える』に非常にわかりやすく書いてありますので、ぜひ求めていただきたいと思います。

大谷派が部落解放同盟から非常にきつい糾弾を受けたのが一九六九年でした。その糾弾のもととなった難波別院差別事件が起きたのが一九六七年です。差別事件が起きているにもかかわらず本山は、その事件について二年間もの間全然知らなかったのです。問題にされているにもかかわらず、それは難波別院の問題だからと言ってまったく取り合わなかったのです。

同朋会運動に欠落しているもの

私は一九六九年四月に教育部長になりました。なった途端に三つのことが起こりました。一つは靖国問題です。靖国神社国家護持法案が国会に提出されて通りそうになったら、それを契機として真宗教団連合ができあがりました。それと今度は逆に、同朋会運動潰しが始まりました。それが一九六九年四月に起こった開申問題、いわゆる東本願寺の教団問題、江戸時代に帰ろうというものです。そういう運動が起こってきました。それと部落解放同盟からの糾弾ということが同時に起こってきました。その頃に朝野温知（イ・スリョン）さんが同朋会運動は危ないと指摘されました。同朋会運動に欠落しているものがある。それは何かといったら、部落差別の問題が欠落しているというわけです。

私は教育部長になりたてなものですから、何のことかわからない。それで、滋賀県の被差別部落のお寺へ私を連れて行って、夜座談会をしました。我々の問題を放っておいて同朋会運動ということが言えるのかという。皆さんは、石川県におると気が付かないのかもしれませんが、そういう運動の中から、部落解放同盟から糾弾をうけたでしょう。その頃は同和部も同和推進本部も部落解放運動もぜんぜん目覚めていないので、本山に組織がなかったのです。部落差別の問題は社会問題だから教育部の担当にしろということで私の担当になりました。部落解放同盟に回答書を持っていくのも、話をするのも全部私の仕事になりました。

これは部落解放同盟東京都連合会に勤めておられた浦本誉至史さんに送り付けられてきた差別ハガキです。何べんも何べんも、この人に差別ハガキが送り付けられてきました。友永さんが全文紹介してくださいました。ハガキを読みます。

「浦本エタ史、おまえはエタ。生まれた時からエタ。生きている間ずーとエタ。死んだときもエタ。そして死んだ後もエタ。エタはエタ。あくまでもエタはエタ。どこまでいっても浦本、おまえはエタ。エタはエタであって決して人間ではない。おまえは屠殺場へ送り返して豚に殺されろ。綾瀬川に沈めて白骨死体になれ。エタはダニのように何かあるとすぐ集団で襲いかかってきて人間に迷惑かける。ゴキブリやハエのようなやっかいでうるさい下等生物で殺す必要がある。東京という日本の都にお前たちのような粗大ごみはイメージダウンになってしまう。部落民は焼き殺せばいい。大阪（塗りつぶし）の特殊部落などは部落ごと焼き殺してしまえばいい。大阪（塗りつぶし）の朝鮮人居住地も同じく焼き殺してしまえばいい。エタと在日チョンという二大日本のクズはあの世送りがいい。ゴミダニエタ浦本は死ね。」

こんなハガキが送られてきました。

この犯人は捕まり、裁判にかかって懲役二年の実刑判決を受けました。このハガキの文字は、非常に特徴のある字なのですが、東京でこういうハガキが送られてきたという差別事例を発表して学習をしていたら、その講義を受けたある図書館の職員が、図書館でこれを書いている人を見たことがあるということで、犯人を捕まえることができた。懲役二年の実刑判決を受けたそうです。

木越　樹 氏

それとは別に今度は、奈良県の水平社博物館前で差別街宣がきて、水平社博物館の前で、「どエタどもは慰安婦イコール性奴隷だ」とこういうことを言っているんですよ。「文句があったら出てこいエタども。ここなんですか、どエタの発祥の地、なんかそういう聖地らしいですね。エタやら非人いうたら大勢集まって糾弾集会やら昔やったんと違うんですか。出てこいエタども。何人か聞いとるやろエタども。ここはエタしかいないエタの聖地やと聞いとるぞ、出てこいエタども。お前らな、日本中でなめたマネさらしやがって」などといったひどい差別的な街宣がありました。これも水平社博物館を運営している公益財団法人奈良人権文化財団が訴えて、裁判にかかって有罪判決を受けたという報告が書いてあります。こういう差別がずっと書いてありますが、被差別部落の人たちは９０パーセントといってもいいと思いますが、親鸞聖人の門徒なのです。東西本願寺の門徒なのです。今あげたような事例は、他人の話と違うのです。私たちは、何やうちの門徒を差別するのか、といって立ち上がるのが本当なんですけれども、その教団そのものが部落差別をして来たのです。

部落内の門徒衆へ

これは、浅野温知さんと滋賀県のお寺を回った時にずいぶんいろんな話を聞かされました。部落門徒は、お寺に参っても本堂には入れないのです。縁側にも上れなかったそうです。水平社が創立された大正十一年のことです。『学習資料集』の十七ページをご覧ください。「部落内の門徒衆へ！」という文章です。「我々は今日まで穢多だとか特殊だとか言う忌まわしい呼聲を以て一般世間の人から軽蔑され、同じ開山上人のご門徒仲間からさえ人間らしい付き合いをして貰へませんでした。」報恩講だといって、みんなお寺にお参りに来るでしょう。普通みんな本堂に入るでしょう。お百姓さんだろうと誰だろうと。ところが、部落門徒は入れなかった。ひどい話をずいぶん聞きました。石川県ではあまり部落差別がないと聞いていますし、意識が低いことも知っていますが、金沢のあるお寺の住職から聞いたことがあります。門徒に被差別部落の門徒があると。昔は報恩講に行くと、必ず終わってからご膳が出るでしょう。一杯飲んで帰ってきたものです。それもだんだんなくなってきましたけれども、部落門徒の家に行くと住職にはご飯を食べてもらえないから、お金をおひねりにしてお椀の中に入れてあるのです。いただきますと言ってお椀をあけるとおひねりが入っているのです。そのおひねりを懐に入れて、ごちそうさまといって帰ってきたものやという話を聞きました。おひねりを懐に入れて帰るほうは、それで済んでいるのですが、わしらのご飯は住職に食べてもらえんのやという人たちの苦しさ、悲しさをわからんのや。足を踏みつけている奴に足を踏まれている者の痛みが分かるか。これは糾弾の中で何べんも聞かされました。「足を踏まれている者の痛みがお前らにわかるか」。そういうことが糾弾を通して初めて、ああそうだったかと気が付いてくる。普通は気が付かないのです。だんだんそれに気が付いてきました。

糾弾とは何か

『学習資料集』にも載っていますけれども、一九六九（昭和四四）年に教団は部落解放同盟の糾弾を受けました。糾弾を受けた時の内局は訓覇内局です。同朋会運動を推進してから五年経っている。御同朋じゃ御同朋じゃといっているでしょう。いっておきながら、解放同盟から糾弾を受けて、第一回目と第二回目の回答書が載っていますから両方とも読んでみてください。

第一回目の回答書には、すまなんだということが書いてあります。難波別院という大谷派の大別院です。そこの別院の輪番が差別事件を起こして糾弾を受けました。この第一回目の回答書は、内局が書いて、私が持参しました。部落解放同盟に回答書を持ってきましたといったら、相手は笑っているのです。忘れもしない。その時の書記長は

上杉佐一郎さんという人でした。この人は、福岡の被差別部落出身の方で非常に優秀な方でした。この人が先頭に立って東本願寺の糾弾にあたっていました。それから西岡サトル。この人は奈良県連の人で優秀な運動家でした。それから谷口修太郎という事務局長がいました。この三人が受け取ったのですが、表紙をめくりもせずに笑っていました。「木越さん、あなたこれは必ず書き直して持ってくることになる」と言われました。これは読むまでもないということです。何が書いてあったか、読んでみてください。難波別院輪番という宗門の要職にある者が差別事件を起こしまことに申し訳ない。お恥ずかしい。すぐに退職させます。我々もこの事件を契機としてもう二度と起こらないようにきちんと対処しますと書いてあります。最近ですと不祥事を起こした会社の社長がよくテレビで頭を下げ謝っているでしょう。あれと同じです。大変申し訳ないことをしました。二度とこのようなことが起こらないよう善処しますという回答書なのです。読むまでもないということはどういうことかというと、表紙に「解答書」と書いてありました。読むはずがない。第二回目からは、ちゃんと「回答書」と書いてあります。

帰ってから浅野温知さんに読んでもらったら「これはだめだろ、単に内局の問題でなく、全宗門の問題にすべきだ」というので、大谷大学の寺川先生を中心とした先生や教学研究所の先生、そして議会の有力者を集めて、南加賀詰所に詰めて三、四日かけて喧々諤々して、真宗大谷派は差別教団だという結論になったのです。差別教団だということに気が付かなかった。差別を生み出している教団であった。そういう結論に至って第二回目の回答書が出たのです。

宗門の差別体質

私がアメリカから帰ってきたのが一九六七（昭和四二）年の暮れです。私が何で教育部長にさせられたのかといいますと、鈴木大拙先生が一九六六（昭和四一）年に親鸞聖人の『教行信証』を英訳され、その原稿がすべて出来上がって、鈴木大拙先生は亡くなっていかれたのですが、その原稿をもとにして英訳『教行信証』の出版に取り組めという仕事があったからでした。

大谷大学や教学研究所から人を集めて対応したけれども、大谷派の体質というものは貴族体質です。我々は今でも貴族体質なのです。住職、住職いわれるものだから、今でこそ御斎によばれる席がなくなりましたが、昔は年忌法要に行くとご膳につきます。僧侶は上座です。そうすると、僧侶に近いほうが上座ですが、私はそんな高い所に行かないとかいって、座るのに二、三十分かかる。それは僧侶だけでない。みんなの体質がそうなのです。

私がアメリカから帰ってきた時、本山の報恩講にご招待を受けました。十年間もアメリカでご苦労さんだったというので、御斎の接待をするから出てきてくださいといって言われて夫婦で伺いました。そのときハワイの開教監督をして帰ってこられた井上瑞縁さんご夫婦と、私のところと二組招待されて御斎をいただきました。今でも御斎接待はありますが、当時の接待の形から随分変わりました。当時は、ご陪食といいました。私はご招待を受けていっていますので、大寝殿で一番上座に座らせていただきました。大寝殿には、一段高いところがありまして、そこに分厚い座布団が一枚置いてあります。そして御斎につく人がずらっと席について並ぶと、袴をつけた方が高坏でお酒を持って出てきて、一人ずつ注いでいくのです。そしてそれは飲んではいけなくて、置いておかなければならないのです。そうすると「今から静謐の声をかけます」という案内があります。静謐の声とは、「しー」という声です。そうしたら頭を下げろというのです。今から生仏さまが出てこられるから頭下げろということです。何べんも言いますが、同朋会運動をしている訓覇内局が、口では御同朋御同行と言っているのです。頭下げろというので頭を下げる。上座にいたので、横目でみていたら襖がすーと開いて、ご連枝が入ってこられ、厚い座布団に座られる。そしたら、ご飯のふたを取って、おつゆのふたを取って、お箸をとられて合掌して、お箸をお椀にちょんちょんとつけて、お箸をおいて合掌して出て行かれる。そうすると「はい頭を上げてください」と言われる。そうしたら、井上さんの奥さんが、「木越さんご宗門はこんなんで大丈夫でしょうかね」と言われた。何べんも言いますが、訓覇内局の時ですよ。そういう体質、これが差別を生み出しているのです。

親鸞不在

部落門徒は人間扱いせんのです。『学習資料集』に米田冨さんの「米田冨の怒り」というのが載っています。米田冨さんは水平社創立の時からの闘志です。浅野温知さんと一緒に、水平社創立の時からの闘志です。私は、水平社を創立した西光万吉さんにお会いしたことはありません。けれども、西光万吉さんのお寺の総代をしていた坂本誠一郎さんや米田冨さん、木村京太郎さん、それから最初に委員長になった、

南梅吉さんらと京都で真宗同和問題研究会（真同研）というのを立ち上げてわずか二年でしたが、取り組んでいた時に、浅野温知さんが水平社創立のときからの人を呼んで、お話を聞いたんです。米田富さんの話も聞きました。その頃はだいぶお年でした。水平社が創立したのは一九二二（大正一一）で、お話を聞いたのは一九六七（昭和四二）年ですから五十年ほど経っていました。水平社創立の時に二十五歳だったら七十五歳です。その米田富さんが第六回糾弾会で立ち上がって言ってくれたのです。朗読します。

「先刻からね、皆さん方のお話を聞いておりますとね、私ども親鸞を信じておるものとしましては、まったくここへきても力ぬけするわけです。さっきから皆さん方ね、第一番、議会の方々もそれから本山の方々も合わせて、私お聞きしたいと思うんですけどね、先ほどから何やら差別したことが悪い申しわけないとか何とかとこう、我々に謝るように言うておられますけどね、私は皆さん方、本願寺の僧侶としてね、そういうことはご開山に申しわけなかったというような気持ちはないんですか。」　私は門徒だけれども、東本願寺も来たことがないとおっしゃいます。なぜなら親鸞不在とおっしゃいます。ここには親鸞がいないと言うのです。これだけのことを言われてまだこたえないのです。親鸞不在というのは、米田富さんがはじめて言われたのではないのです。一九二二（大正一一）年水平社が創立したときから、ここは親鸞不在だといわれました。

親鸞オジサマに会いたい

藤田ジャクリーンという方をご存知ですか。背の高い白人で、フワッとしたスカートをはいているとまるでフランス人形が歩いているようです。この人は、若いときに両親を亡くしてカトリックの修道院に入ってフランスにおられたのですが、パリにいた時に親鸞聖人のフランス語訳『歎異抄』を読まれました。読み終わったら、読み始めた時の自分にもう帰れなくなったと言うのです。皆さんそんな本の読み方をしたことありますか。一冊読み終わったら、読み始める前の元の自分に戻れないようになったなんて。親鸞オジサマに会いたいと思ったそうです。それが十三歳のとき。二十歳になるまで一生懸命にお金を貯めてシベリア鉄道でボストンバッグ一つを持ってウラジオストクまでいって、そこから船に乗って日本に来た人です。今でも日本にいます。ずっと東本願寺で話をされていたけれども、今の皇后陛下にお招きを受けてフランス語を教えに行っておられた。そうしたら大谷派の若い連中から貴族的だといって批判を受け、恐ろしくなって話して歩かれなくなりました。

一九八一（昭和五六）年ころに第三回世界同朋大会があり、アメリカ、ハワイ、ブラジルからも来ていました。記念講演は、広瀬杲先生で、しめくくりに藤田ジャクリーンさんの感話があって、ジャクリーンさんが感話の持ち時間が二十分しかないのに一時間くらい話された。そして、やっとすんだと思ったらポルトガル語で同じことを話された。やれやれと思ったら今度は英語で話された。そこで何を話されたかというと、米田富さんと同じで、「私は親鸞おじさんに会いたい」といって来たんだというのです。親鸞聖人はとうに亡くなった人だというのは聞いたけれども、その親鸞オジサマに触れて、親鸞オジサマを生きている人が日本に行ったらいるに違いないと思って楽しみにしてきたというのです。

まず、横浜についたらすぐに京都に向かって、東本願寺に来たというのです。でも、親鸞オジサマはおられなんだと。親鸞オジサマに会いたいと思ってきたけれども、親鸞オジサマはおられなんだ。聖人という人はいたけれどもオジサマはおられなんだというんです。

その後、藤田ジャクリーンさんは京都大学の先生と結婚して、金沢大学と交換留学で金沢に二、三年くらいおられたことがありました。金沢のどこにいたのか知りませんけれども、朝おばあちゃんがリヤカーに野菜を積んで売りに来たから、大根一本頂戴といったら、おばあちゃんは、背の高い白人が大根くださいというものだから、大根渡してから「ナンマンダブナンマンダブ」って言ったそうです。そしたら藤田さんは喜んで、ほらここに親鸞オジサマがおいでたというのです。そしたらもっとおばあちゃんと仲良くなって、おばあちゃんがいつも行っていた法話会を紹介してもらって通うようになりました。だけど、ある時藤田さんの夫から「おまえはいつまでたっても味噌汁一つ作れない、いつになったら味噌汁の味を覚えるのか」と言われたそうです。

藤田さんは、いろいろ苦しいことがあって日本に来て三回、自分で自分の命を絶とうと思ったそうです。いろいろ差別を受けるわけです。白人扱い、外国人扱いされるなかで差別を受けていきました。そしたら法話会の仲間がお金を集めて、ジャクリーンさんあなた生まれ故郷のパリへ一遍帰ってきなさいといって飛行機の切符を渡してくれたそうです。ところが、藤田さんは大変ありがたかったけれどもお返ししました。なぜかというと、ここは私に

とっては異国ではないのです。親鸞オジサマの御同朋御同行という国で、私はここにいて、ただ一本道を歩むのです。一本道ですから迷いません。ナンマンダブツの一本道を歩むだけですから迷いません。だからフランスにはもう帰りません。親鸞さまと一緒になってお念仏の道を歩ませていただくのです。それを世界同朋大会で話された。アメリカでもハワイでもブラジルでも日本人はみんな差別されているのです。踏まれている痛みを知っているのです。ですからジャクリーンさんの話を聞いて非常に感動したのです。それで次の第四回世界同朋大会はブラジル会場だったのですが、ブラジルではぜひこの差別の問題を課題にして取り組んでいきたいということになり、高史明さんに講師をお願いして開催されました。

御同朋・御同行の精神

宗門の深い体質、糾弾を受けて部落差別の問題に取り組んだ中から同時に教団問題が起こったのでしょう。これは単なる経済問題ではないのです。やれ枳殻邸がとられそうになったとか、今もまだ本廟維持財団問題をひきずっていますが、単にそういう問題だけではないのです。同朋会運動を展開して、御同朋御同行と言っておるけれども、御同朋御同行精神というのがどこかに飛んでいってしまっている。親鸞聖人は御同朋御同行とかしずきてき仰せられてといわれたのは蓮如さんです。同朋会運動をはじめられたのは、蓮如さんですよと私はいつも言うのです。御同朋御同行ということばに目をつけられて、かしずきて拝んでおられるというのです。これは寺川先生が言われたのですが、その御同朋御同行という精神が見えなくなってしまった。江戸時代を通して、宗門は幕藩体制によって守られたと思っています。その一方で、それによって宗門は堕落した。御同朋御同行精神を失った。それが久しぶりに歴史の表へ名乗り出てきたのが水平社創立だとおっしゃる。気が付いたというのです。

『学習資料集』の中に「部落内の門徒衆へ！」といって水平社の人たちが部落門徒へ呼びかけた。そして水平社創立時に集まってきた人たちが一番先に足を運んできたのが東本願寺と西本願寺。京都駅に集まって列を組んで訪れました。その時大谷派の事務総長は阿部恵水でした。「ご趣旨ごもっともでございます。ご協力しましょう」と言ったそうです。それを聞いていて、「こりゃあかん」と思ったそうです。差別している教団になりきっている自覚が全然ないからです。西本願寺へ行ったら、お西の寺務総長は、「協力するもしないもない、もともと私たちは御同朋御同行という平等精神ですから。いっしょですよ」といったそうです。これを聞いて話にならないと思ったそうです。

親鸞聖人は一声唱えたら首が飛ぶような恐ろしい中を我々に向かって膝を交えてあなたも御同朋御同行だと拝んでくださったのだと。それを今の坊さんは鼻歌でも歌うようにナンマンダブツナンマンダブツと称えているけれども何の自覚もない。そういうことを部落内の門徒衆へという文に「吾々が早く此の忌まわしい差別を取除いて真実御同行御同朋と仰せられたように如何なる人達とも交際出来るようにするほうがどの位、御開山様の思召に叶う事か知れません」、御同朋御同行精神、私たちは親鸞聖人の門徒だと、さきほどの米田富さんにしても、創立の時にみな門徒衆が東西本願寺へまずやって来て、栗須七郎という人が賽銭箱の上に立って演説したそうです。ここに親鸞聖人はおられません。御同朋御同行とおっしゃっていただいた我々に向かってあなたも御同朋御同行です。あなたのいのちは尊いと教えてくださった親鸞聖人はここにはおらないというのです。それで我々は水平社運動がなぜあるかというと、ここに親鸞聖人に帰って来ていただくことが水平社運動の精神だということを言われた。しかも、本願寺だけではなくて、東北地方から部落のあるところを回って、我々の運動は親鸞さまに帰って来ていただく運動だといって歩いたそうです。栗須七郎さんは、部落の人たちから今親鸞というあだ名をつけられたそうです。坂本清一郎さんが、募財拒否の通告書を読み上げたそうです。「決議通告、曩（さき）に我等の行動に対して賛意を表せられたるにつき、左の一項を通告に及び候なり。全国水平社中央委員長南梅吉」と読み上げたそうです。

水平社宣言を書いたのは西光万吉です。西光万吉はペンネームです。本名は清原一隆さんです。坂本清一郎は西光さんのお寺の総代さんの家族です。坂本清一郎さんがこの通告書を書いた。「先に我々の行動に対して賛意を表せられた」という、先にというのは一年前ということです。大正一一年にご本山に訪れた年のことです。この決議通告には理由が付されています。「我々が従来特殊部落その他の名により一般社会より侮辱を受けたる禍根の一は部落民の経済的に貧弱にして文化生活の充実を期し難かりしによるものと信ずる。しかして、我等がこの際蹶起（けっき）して解放運動を徹底せしめんとするには必ず経済的独立を計らざるべからず。これに対し既に我等の行動に賛せられたる本願寺は右通告を諒納せら

るべき当然の社会的、宗教的義務あるものと信ず。これ本決議通告をなす所以なり。真宗本願寺派管長事務取扱大谷尊由殿、真宗大谷派管長大谷光演殿。

一、向後二十年間我等部落寺院及び門信徒に対しいかなる名義による募財をも中止されたきこと」。二十年間待ってください。被差別部落の門徒さん、おじいちゃんおばあちゃんはね、普通の人たちが十万円上げるとしたら二十万円、五十万円出す人たちだけれども、立ち上がった人たちはみんな若いです。じいさんばあさんに出すなって言えないのです。だから本山にしばらく、二十年待ってくれ。我々に経済的な力をつけさせてくれ。立ち上がるためにはお金がいるからとこういう通告です。「部落内の門徒衆へ！」という通告文の中で「うっかり称えたなれば、首が飛ぶような恐ろしい中を真にこの世も未来の世も地獄を一定の住家ときめて命がけでお伝えくださったほどのお念仏を小唄気分でお唱えできる気安さを思えば思うほど一方ではあだやおろそかにはできないことも思わせていただかねばならぬ筈です」とおおせられたように、あなたの命も御同朋である。御仏弟子である。金剛心の仏弟子であると呼びかけておられるということをくみ取って初めて、御同朋精神が蘇ってくるのではないですか。それを私たち教団が忘れているというのです。そして門徒を差別しているというのです。

非常に活躍してくださっている同和関係寺院協議会というものがあります。被差別部落の中にあるか、被差別部落の人たちを門徒として抱えておられるお寺の人たちの協議会です。浅野温知さんがこれは我々が自ら名乗りを上げた協議会だと。けれども親鸞聖人を宗祖としている真宗の寺院はみんな同和関係寺院になるはずです。関係のない寺院はないです。差別していることを痛みとして、親鸞聖人の御同朋御同行の精神を回復したいと願って立ち上がらなければなりません。私には関係ないとは言えないはずです。

如来大悲のこころに立つ

今年私は三月にアメリカに行ってきました。アメリカの推進員養成講座と開教使の研修会で一週間ロサンゼルスとバークレーに行きました。そうしたら白人の坊さん、こういう人たちがもう出てきているのです。英語で『教行信証』が読めるでしょう。『歎異抄』も清澤満之の論文も英語で読めるのです。そういう時代がきている。高木顕明を知っていますか。大逆事件に連座させられて死刑判決を受けて、そのあくる日死一等を減じて無期懲役と言われた。それで大谷派から僧籍をはく奪されました。被差別部落へ飛び込んで、被差別部落の門徒の人たちと親鸞聖人のお念仏の教えを喜んでいた人でした。「余が社会主義」という論文があり、何が書いてあるかといいますと、余が社会主義はマルクスからきているのでもない、片山潜からきているのでもない、幸徳秋水からきているのでもないというのです。ナンマンダブツの社会主義である、如来大悲のこころに立つ社会主義だといいます。万人が救われるのだと。救われないというのはおらんのだと。金持ちでも、社長でも救われるのだけれども、ことに明日どうして生きていったらいいかわからないような人たち、目の前の人たちこそ如来大悲の眼目なのだと。この文章に触れて僧侶になろうと決心したのがフレデリックブレニヨンという白人です。こんな人がアメリカに出てきているのです。ご宗門にとって部落差別問題というのは非常に大事です。これに触れて初めて、御同朋御同行ということを親鸞聖人がどうしていっているのかということの真髄に触れていくことができるような気がします。いただいた時間が参りましたので終了させていただきます。

東本願寺の本

改訂 大乗の仏道 ―仏教概要―

1987年以来、仏教概要の基本書となっていた『大乗の仏道―仏教概要』を全面改訂。

このたびの改訂版の大きな指針となったのは、「釈尊が明らかにされた仏教と、親鸞がうなずかれた仏教とは、どこでつながるのか」という問いである。（略）そして釈尊や仏弟子たちの仏道を支えた心である求道心としての信仰について確かめた。その求道心は、やがて菩薩の思想を生み出すことになるが、そのときの仏教の課題に注意し、大乗仏教が現れる背景と意味を明らかにするように努めた。（序から）

定価　2500円（税別）

仏教ハンドブック
―子どもたちと聞く仏さまの教え

お釈迦さま（釈尊）の教えと、その教えを今にまで伝えてくれた僧侶たち、そして仏教の教えに関するさまざまなキーワードについて、子どもたちにお話できるような「例話」を掲載した本です。

定価　1800円（税別）

『教行信証』入門⑥

『教行信証』撰述のこころ
―三つの序文によって―

平野　修

三つの序文

『教行信証』には、「総序」、「別序」、「後序」と言われる三つの序文があり、その三つには共通の事柄があります。今回はそのことをもとに、親鸞が『教行信証』を撰述されたそのおこころについて考えてみたいと思います。

三序に共通する事柄ですが、まず「自名を述べる」ということです。「総序」（聖典一五〇頁）では、「ここに愚禿釈の親鸞」、「別序」（聖典二一〇頁）にも同じく「ここに愚禿釈の親鸞」。そして後序（聖典三九九頁）では「しかるに愚禿釈の鸞」と、三序に共通してご自身のお名前が述べられています。

つぎに「仏恩を述べる」。それぞれに「如来の恩徳の深きこと」とか、「仏恩の深重なること」。「仏恩の深きこと」と、仏恩が述べられている。

そしてもう一つは、「制作のこころを述べる」。これも三つに共通しています。「総序」では「ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなり」、つまり『教行信証』を書きますとおっしゃっている。「別序」では、「取捨を加うといえども、毀謗を生ずることなかれ」という表現。「後序」には「これに因って、真宗の詮を鈔し、浄土の要を撫う」。これも『教行信証』制作を表しています。

このように三つの序文で繰り返されている事柄から、親鸞は、「仏教とは浄土真宗である」ということを、教・行・証と信との関係で明らかにされたと考えられます。

仏教とは浄土真宗

仏教とは浄土真宗。けれども我々は、浄土真宗は仏教の一つだと思っています。親鸞の当時も、すでに比叡山に天台宗があり高野山には真言宗、南都に六宗がある。その状況を背景に「法難」と言われるものが起こるわけです。

法然、親鸞は流罪になり、また死罪になったものもいた。弾圧を受けた。ではその弾圧を受けた理由はどこにあったのかというと、仏教とは浄土真宗であるということが明らかにされ、それが理解されなかったことから起こったのだと親鸞は受け止めたのです。

では、すでにある各宗はどうなのか。それは浄土真宗と別にあるのではなく、浄土真宗に帰すための方便であり、それらは浄土真宗に含まれる。聖道門の仏教も浄土門のなかに収まるということを、自分の言葉ではなく、経・論・釈によって書かれたのが『教行信証』。ですから『教行信証』は、広い意味で教化のために書かれたものなのです。

親鸞の、『教行信証』を中心とする精力的な著作は、自らの思想を高め純粋なものにした成果のように受け止められることがあるが、そうではなく、『教行信証』は、明らかに教化のために書かれた。

承元の法難

『教行信証』が書かれる最も強い縁となったものが、いわゆる「承元の法難」ですが、そのことが「後序」で述べられています。

「竊かに以みれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛なり。しかるに諸寺の釈門、教に昏くして真仮を知らず。洛都の儒林、行に迷うて邪正の道路を弁うることなし。ここをもって興福寺の学徒、（中略）承元丁の卯の歳、仲春上旬の候に奏達す」

（聖典三九八頁）

親鸞の文章を読む場合、気をつけなければならないのは接続詞です。文章が厳密だという場合は、接続詞が非常に厳密に使われる。

そこでこの「後序」ですが、まず「しかるに」という接続詞です。そしてもう一つ「ここをもって」という接続詞の使い方です。

「しかるに」は、その前の文章と関係します。まず「聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛なり」、つまり聖道門の仏教は、仏教の形をしているけれども、もはや仏教でなくなっている。浄土の真宗は証道つまり、念仏のところに行証が実現していると。

これを受けて「しかるに」という接続詞は、「当然のごとく」ということで、

「諸寺の釈門、教に昏くして真仮の門戸を知らず。洛都の儒林、行に迷うて邪正の道路を弁うることなし」

そういう現実が、必然的に起こっているというわけです。

そしてつぎの「ここをもって」は、仏教でなくなっているにもかかわらず、それを仏教だとしている現実が背

景となってという意味になります。

つまり最初の「しかるに」を受けて、そしてつぎにある現実が背景となって、興福寺の学徒が訴え状を出したと。「そのことによって」という接続詞が、「ここをもって」。親鸞は、なぜ流されたり殺されることが起こったのかというとらえ方をしたわけです。

ここに仏教あり

この出来事もいろいろな見方ができます。しかし親鸞はこの事件の第一の原因は、まず「聖道の諸教は行証久しく廃れ」ているからだと。

そして、ではなぜそういう法難に自分は遇ったのかということが、「後序」の二番目の段落のところです。「しかるに愚禿釈の鸞」から、なぜ自分はそういう法難に遇うのかというと、法然上人に遇って、浄土の真宗に帰したからだと。これ以外にないわけです。偶然や巻き添えなどではなく、必然的なことであったと。

仏教でなくなっているものが仏教を言い続けることに対して、それは仏教ではない、ここに仏教ありということを言えば、必然的に仏教でなくなっているものが押さえつけに来る。だからこの法難は必然であったわけです。

法難に遇った理由が、法然上人と遇って真宗に帰したということであるから、それは避ける必要も、逃げる必要もない。そこには必然の理由があるのだ。この必然の理由を明らかにしなければ、この法難は意味を持たない。単なる災いか災難になる。

親鸞は、自分のやらなければならないことは、必然の理由をはっきりしていくということ。それは真相を究明するという話ではない。仏教が隠されていく。仏教が覆われて、人々を迷わせていくことに対して、ここに仏教ありと宣言することなのです。

三願転入の文

最初に、三つの序文に共通して『教行信証』を制作することが述べられていることに触れましたが、『教行信証』にはもう一か所、そのことに触れているところがあります。それが「三願転入」（聖典三五六頁）と呼ばれる文章です。

親鸞は、少なくとも『教行信証』を制作されたときには、あの法難の意味について、はっきりとした認識を持たれます。つまり仏教が仏教でなくなっていった理由です。それが「三願転入」に示されます。

「論主の解義」と「宗師の勧化」をとおして、第十九願と第二十願のなかにその理由の全貌を見出すことができたとあります。

ここでも、「しかるにいま」という接続詞が使われます。「いま、その理由がはっきりしました」という意味です。その理由がわかったから、「至徳を報謝せんがために、真宗の簡要を摭う」と、つまり『教行信証』を書きますと。

つまり、この法難の背景には、実は仏の悲願があった。第十九願と第二十願を親鸞は特に「悲願」と受け止めますが、そういう仏の悲願と無関係ではなかったことが明らかになったということなのです。

仏の悲願

法難という出来事が仏の悲願と対応しているということが、やはり最初の序文、「総序」にあります。

「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。しかればすなわち、浄邦縁熟して、調達、闍世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまえり」

（聖典一五〇頁）

「しかればすなわち」という接続詞で示される逆害の問題です。調達とは提婆達多のことですが、仏への謀反を起こした。阿闍世は世間の法への謀反です。しかしそういう逆法、無法の存在が、浄土の法を開いてきたと親鸞は言います。

そういう意味では、この「総序」の前半の部分と「後序」の前半の部分とは、相応している。深いつながりを持っているかと思うのです。つまりそれは全体で、人間の営みとは、如来の本願を明らかにしているのだということです。

人間にとってそれは悲劇や、悲惨なことと思われたりするが、その出来事は如来の本願を明らかにするためのものではないか。たまたま起こった出来事ではない。浄土を開くという意味で起こった出来事であると。

ですから、我々の人生、人間の営みに、つかず離れずに如来の本願が通底し、貫通している。我々の人生を貫いているもの、それが如来の本願なのだと。

そういうふうに自分の出遇った法難を見ることができた。そしてそのことを述べることが、如来のおこころに叶っていくことであり、同時に法然上人のこころにも叶うものであるから、この『教行信証』を制作するのだと。

信心の問題

我々が、自分は浄土真宗だとした場合、先ほど申し上げた、「仏教とは浄土真宗である」ということがどのように受け止められているか、自分を点検しなければならないと思うのです。

親鸞は「化身土巻」で、浄土真宗に帰すべく方便としてあるのがいま現にあるところの仏教である。その仏教が目指しているものは浄土の中の一部分、辺地とか懈慢、胎生ということで、浄土の一部分に収まるという理解を示されます。浄土真宗以外にも仏教があるのではなく、すべては浄土の真宗に収まるのだと。

ではその浄土の真宗は何において成り立つのかというと如来の本願。その如来の本願においてあるということを示すのが、『教行信証』の真実の巻、五巻なのです。浄土といってもそれは本願においてある。教も行も証も本願においてある。

その本願が我々と関係する、つまり衆生を教化し覚らしめるものとして名号、本願の名号ということがある。

ですから衆生にとっては本願の名号が、教化、教えという意味を持ち、覚らしめるという行証という意味を持つ。名号のところに教行証がそなわっているわけです。我々が努力して覚っていくということでなく、名号のところにすでに教行証がある。

ですから我々の問題は、では名号に教行証がそなわっていることがどうしたらわかるのかという問題が残るわけです。

その、名号にすべてが備わっていると分かるという問題が、信心という問題になるわけです。真宗の信心とは、問題の領域から言えば、名号にすべてが収まっていると了解できたというのが信心ということです。

我々の立場

ではどうすれば分かるようになるのか。親鸞によると、念仏にすべてが収まっているということが分かる分かり方があるのです。

我々の場合、ものごとをわかろうとするとき、分からないものを自分の向こうに置きます。ですから、名号にすべてが収まっているということも、名号を向こうに立てて調べたり、考えたりする。けれども、そういう問題の立て方の全体が厚かましいとなったら分かるというのです。

我々は考えたら分かる、一生懸命に尋ねれば分かるという立場です。初めからそこに立っていて、そういう立場がどうなのか考えたことがない。ところが、始めから立っている立場が翻って、この立場では絶対に分からないということになれば分かります。その場合、「絶対に」ということがなければなりません。

浄土ということも、これは如来の本願において表されたものです。けれども我々はあるなしの論議をして、果ては人間の理想として表されたのだという理解になっていく。

それは、考えていけば分かるというところに立っていて、その立場を疑わないことによります。それしかないと考えているからです。

それが、今の立場にある限りは絶対に分からない。絶対に分からないということは、疑う余地がないという意味です。

分からないというのは、迷い続けるということです。分かりたいが分からないと繰り返すことが迷いです。一生懸命に迷うのです。

無碍光如来

善導は、この立場では絶対に分からないということを、自らを深く信ずるということで表されます。いまの自分の立場では、名号にすべてが収まっていることを信ずることなど、絶対にできないということを表されたわけです。

いま自分の立場に立つかぎり分からないのだと。そういう自分であることを深く信ずることができた。曠劫以来、また未来にわたって迷い続ける存在であることが了解できた。

ではどうしてそういうことが起こったのか、疑いない自分を知ることができたのかというと、善導は、それは仏の教化を受けたということであったと。

疑いようもない自分の真相というものを知ることになったのは、仏の教化による。疑いようもないもの、つまり真実です。真実に遇ったわけです。

そして、そういう真実に遇うについては、如来の教化なくしてはありえない。そうすると思わぬかたちで、如来にすべて収まっているということが知らされてくるわけです。

別の言い方をすれば、自分のことが疑いもなく明らかになったというあり方で、如来を信ずるということが起こる。親鸞はそういう如来のことを無碍光如来と受け取られます。

生まれつき我々が立っている立場。これほど疑い深い、そして一生懸命求めているのになぜそうならないと言って、深い恨みまで持つような我々のこころを障害ともせず、逆にそういうこころがなぜ起こってきたのかまで明らかにされる。

ですから如来は文字通り無碍光如来であった。「尽十方無碍光如来」という名号は、文字どおり仏陀であった。そして自分が深く信ぜられるというかたちで如来を信ずることができた。そういう自分が生まれたわけです。

往生とは誕生

往生という言葉は、生まれるという意味です。何が生まれるのか。自分の在り方からは決して生まれることのない、自分が明らかになる、そういう自分が生まれるのです。

それは、最初に三つの序文の共通点に、「自名を述べる」ということを挙げましたが、そのことと関係します。仏の法によって生まれ出てきた名前を、「ここに愚禿釈の親鸞」とか、「しかるに愚禿釈の鸞」と名乗ったわけです。

往生ということは誕生なのです。愚禿釈親鸞がこれを書いたという意味ではありません。法との関係で生まれた者の名乗りです。

そしてこのことは、さらにもう一つの共通点、「如来の恩徳の深きこと」とか、「仏恩の深重なること」。「仏恩の深きこと」と、仏恩が述べられていることにつながっていきます。

自分のことが明らかになった、それはひとえに仏の恩によると。仏の恩と言っても、それは教えのことです。教えにうなづくことのできたものが仏の恩を感ずるのです。

ですから仏恩を述べられたということは、仏が本願の名号を説かれて、そのことがこの身を教化してくださったということで、仏恩を感じたということなのです。

別序の意味

「総序」と「後序」を主に触れてきましたが、いまひとつ「信巻」には「別序」（聖典二一〇頁）という序文があります。

「信巻」というのは、仏の名号に教行証がそなわっていることが、我々にどうしてうなづけるのかということを問題にした巻です。

その「信巻」・「別序」で、やはり「しかるに」という接続詞を使われて、「末代の道俗、近世の宗師」、つまり念仏者たちのことですが、そのなかにあって、念仏の了解がまちまちで、誤って了解する人たちがいると。具体的には法然門下の人たちのことです。

「後序」では、聖道門の仏教に関係する人たちが意識にありますが、「別序」では、同じく念仏するものたちのことが意識に上がって表されている。

そういうことから考えると、親鸞は聖道門の仏教に対しては、仏教が仏教でなくなっていることの現実と、その意味を一生懸命考えていく。

同時にいまひとつ、念仏ということに触れながら、それが教理や、方法、手段になって、仏教の行であると受け止められなくなっていることに対しても、自分が誕生するようにと、懇切丁寧に、信心を問題にしていくということで、「信巻」に「別序」がつけられているかと思うのです。

そういう三つの序文を一貫しているものがあるとすれば、「仏教とは浄土真宗である」という一点です。

そして、その浄土真宗とは本願においてあり、本願においてあるということは、我々の上に信心となって現れる。そういう意味合いのことを、『教行信証』全体で表そうとするのだということで、三つの序文が置かれているかと思うのです。

（平成三年度　第六回講義
平成四年一月二七日）

編集後記

『震動』第二十四号をお届けします。巻頭言は金浦受英先生にお願いしました。金浦先生は長きにわたり真宗学院の指導そして主任として尽力くださいました。報恩講私記の言葉を通し、私たちに身をよじるような生命がけの懺悔をしてきたのか、問われます。

特別講義からは福島光哉先生の「観無量寿経について」、木越先生の「御同朋精神と解放運動」を掲載しました。福島先生は聖道門から見る『観経』と、善導大師の見る『観経』とはどう違うかという視点の中から、親鸞聖人の受け止め方を展開されました。

木越先生は宗政に携わる経験の中から、差別の問題と真宗の関わりを通し、御同朋・御同行の精神を教えてくださいます。

そして平野修先生の『教行信証』入門では、「総序」「別序」「後序」と言われる三つの序文から「仏教とは浄土真宗である」ということを語られます。

▼この夏はリオで開催されたオリンピックに一喜一憂し、世界中のアスリートの素晴らしいパフォーマンスに感動しました。メダルばかり話題になりがちですが、一人ひとりの選手には、勝ち負けを別にしてオリンピックに至るまでの道程があります。その道程に厳しい現実、様々な背景があるからこそ大きな感動が生まれるのでしょう。（井上　裕）